2018年度地域まるごとケア・プロジェクト
地域包括及び子育て世代包括ケア先進自治体調査＆地域人材交流研修会
開催報告会

暮らしの中で育ちあう
命を守るコミュニティ

2018 年 2 月 17 日（日）

13：30 ～ 16：30

会場：日比谷図書文化館コンベンションホール

2018 年度地域まるごとケア・プロジェクト
地域包括及び子育て世代包括ケア先進自治体調査＆地域人材交流研修会開催報告会
暮らしの中で育ちあう　命を守るコミュニティ

＜概　要＞

平成 31 年 2 月 17 日（日）、東京・日比谷公園内の千代田区立日比谷図書文化館コンベンションホールにおいて、「2018 年度地域まるごとケア・プロジェクト地域包括及び子育て世代包括ケア先進自治体調査＆地域人材交流研修会開催報告会」を開催した。

2015 年度から 2017 年度を第 1 期とする第 2 期地域まるごとケア・プロジェクト初年度の 2018 年度は、大阪北部地震、西日本豪雨、さらに巨大台風 21 号、24 号の相次ぐ襲来、そして北海道胆振東部地震と、これまでになく大きな災害に幾度も見舞われた。

2017 年度に赴いた豊中市では、阪神・淡路大震災被災時に、震災前から地域住民の様子をこまめに把握していた地区では、震災直後に安否確認に回り、多くの命を助けることができたが、隣近所ぐらいの範囲しか把握できていなかったほかの地区では、それが叶わなかった。顔がつながっていることが命を守ることに直結する。以来、豊中市では小学校区ごとに校区福祉委員会という住民の自主的なボランティア組織を設置、命を守ることの出来る地域づくりに取り組んで来た。大阪北部地震では、これまでの取り組みが功を奏し、発生後 4 時間で要援護者の安否確認を終えることができたが、一方で新たな課題が見つかったという。

地域まるごとケア・プロジェクトとしても、顔と顔が見えるまちづくり、コミュニティを、日々の暮らしの中で育てていくことの大切さは、スタート当時から重要視してきたことのひとつである。そこで、2018 年度地域まるごとケア・プロジェクト報告会のテーマを「暮らしの中で育ちあう　命を守るコミュニティ」とし、基調講演を豊中市社会福祉協議会の勝部麗子さんに依頼、これまでの取り組みについてお話いただいた。

後半は、地域まるごとケアをかたちづくる三要素を考える手がかりとして、2018 年度にヒアリングをさせていただいた 3 都市、3 名の方々から報告と提案をいただいた。共通するキーワードは、命と子どもと地域。気仙沼市を拠点に東日本大震災沿岸被災地で活動する一般社団法人プレーワーカーズ理事の神林俊一さん、富田林市金剛銀座街商店会会長で美容室エメールヘア代表の木全剛司さん、世代も分野も越えた地域包括支援に取り組む上越市高齢者支援課副課長の細谷早苗さん、キーワードに基づく立場の違う三人の方々のお取り組みをお話しいただき、勝部麗子さんからコメントをいただいた。質疑応答では、高齢者と子どもをつなぐ仕掛けと男性高齢者の居場所づくりについて質問が出され、壇上から、登壇者がそれぞれ日々の実践を元に回答した。

参加者アンケートでは、多くの方々から勝部麗子さんの基調講演、3 都市の実践者からの報告、特に TTP（とことんぱくる）精神に大いなる共感が寄せられた。

プログラム

13：30　開会挨拶　公益財団法人さわやか福祉財団理事長　清水肇子

13：40　基調講演　「赤ちゃんから高齢者まで、
誰一人として孤立させないまちづくり
豊中 CSW の活動から」
社会福祉法人豊中市社会福祉協議会福祉推進室長　勝部麗子さん

14：40 ～ 14：50　休憩

14：50　報告と提言　先進自治体調査報告
「日々の暮らしで育ち合う　命を守れるコミュニティづくり」

事例報告

○東日本大震災沿岸被災地を中心に遊びとつながりを通じた子ども・子育て支援
一般社団法人プレーワーカーズ理事　神林俊一さん

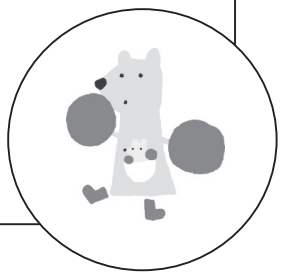
○市民団体、地縁団体や商店会、地域みんながふらっとに考えるまちづくり
富田林市金剛銀座街商店会会長　美容室エメールヘア代表　木全剛司さん

○多機関多職種連携によるすこやかなくらしの地域包括ケアについて
上越市健康福祉部高齢者支援課副課長　細谷早苗さん

コメンテーター
社会福祉法人豊中市社会福祉協議会福祉推進室長　勝部麗子さん

ナビゲーター
にっぽん子育て応援団地域まるごとケア・プロジェクト・メンバー
青木八重子、山田麗子、當間紀子

16：25　閉会挨拶　にっぽん子育て応援団企画委員　柳澤正義



地域まるごとケア・プロジェクト 2018 年度調査報告
ごあいさつ

2018 年度の子育て世代包括及び地域包括ケア先進自治体調査と地域人材交流研修会開催のご報告を申し上げます。

2015 年に公益財団法人さわやか福祉財団から、地域包括ケアにおける地域連携の可能性を探り、既存の制度にとらわれない地域福祉・地域づくりに向けた提案・周知啓発を子ども・子育て分野から行う事業を委託され、2017 年度で第 1 期を終了いたしました。さらに 2020 年度までの 3 年間、事業継続を受託、地域まるごとケア・プロジェクトをさらに進めていくことになりました。

「もっと子育てしやすい社会に！」と 2009 年に立ち上がったにっぽん子育て応援団が、子ども･子育て施策だけではなく、なぜ高齢者支援・介護保険行政にもヒアリングを行うのか。初年度はそこから説明を行う必要がありました。しかし、3 年にわたる調査の間に、地域づくりの中で分野を超えた取り組みが行われる流れが徐々に強まる手応えを感じられるようになりました。

2018 年の夏は、これまでにない天災続きで、今年の一文字に「災」が選ばれたほどでした。大阪北部地震、西日本豪雨、台風 21 号と 24 号、北海道胆振東部地震で被災なさった方々に心よりお見舞い申し上げます。

まちづくり、コミュニティが命を守る。2018 年は、災害による被害を完全に防ぐことはできなくても、平時からの地道な積み重ねが、ひとりでも多くの犠牲を助け、また支えにもつながることを痛感した 1 年でもありました。

コミュニティが命を守る。地域まるごとケア・プロジェクトを進める上で、重点的に捉えている視点でもあり、来年度以降も、欠かさずにいたいと思います。

にっぽん子育て応援団では、2012 年度からひとつの目標を掲げて取り組んでいます。家族まるごと、地域全体で支え合うことを目指す今回の調査が、応援団の目標達成に向けた、重要なテーマと重なる理由として、ここに掲げておきます。

にっぽん子育て応援団の目標

すべての子どもたちが、家族の愛情に育まれ、
また、子ども同士の積極的な関わり合いの中で
そして、地域や社会の多くのおとなたちの慈しみの中で、
心豊かに成長できる環境を保障すること

※「子どもは家族が育てるのか､社会が育てるのか」というとらえ方ではなく､子どもを真ん中において､子どもの成長にとって不可欠な、家族、子ども同士の関わり、地域や社会の多くの人との関わり、それぞれが大切な役割を果たせるよう支えるという考え方に立つことが重要です。

今回、自治体の行政担当者や NPO 市民活動団体のみなさまが、その調査趣旨をご理解くださり、ヒアリング先の紹介からヒアリング日程の調整までを、地域人材交流研修会の会場やテーマ選定から当日の運営までを担ってくださったこと、地域人材交流会に多くの方が参加してくださり、闊達な意見交換をしてくださったことに、心から感謝申し上げます。

2019 年 2 月

（2018 年度地域まるごとケア・プロジェクト
地域包括および子育て世代包括ケア先進自治体調査＆地域人材交流研修会開催報告書　序文より）

【地域まるごとケア・プロジェクト　企画趣旨】

地域全体の福祉を考えたとき、同じ地域で暮らすもの同士の支え合いが自然に行われているのが望ましく、実際に人々の暮らしを支える資源はシームレスである。高齢者対策と子ども・子育て支援対策、障がい児・者対策、生活困窮者対策など、公的制度によってそれぞれの支援メニューは分断されているが、困りごとを抱える人や家庭に求められる支援もまた、シームレスである。地域での暮らしを考えたとき、制度によって分断されたこれらを、困りごとを抱える人や家庭の実情に合わせてフレキシブルに利用できることが求められているのではないだろうか。
介護保険制度から生まれた「地域包括ケア」という考え方は、介護の世界に留まらず、地域で暮らすすべての人々に広げられるべきではないか。制度によって分断された各種支援事業を、地域で暮らす人々をまるごと包み込むように利用していけるようになることこそ、地域での暮らしの実態にふさわしい仕組みになるのではないだろうか。
地域包括ケアを全世代に向けてとらえ、実施していくことを＊「地域まるごとケア」と名付け、これを実現させていくために、子ども･子育て支援における利用者支援事業などの実態を把握、目指す方向性を探りながら、生活支援コーディネーターや生活困窮支援コーディネーターなど、地域での暮らしを支える他の専門職との連携についても、提案していきたい。

第 2 期地域まるごとケア・プロジェクトの概要

第 1 期プロジェクトを経て、高齢および子育てをつなぐ形で地域づくりや地域福祉を進める自治体も見えてきたところから、自治体へのヒアリングと地域人材交流研修会の開催を行い、地域保健福祉およびまちづくりに子ども・子育ての視点を盛り込み、子ども･子育てにも目配りをした実践を積み上げていくこと、その周知と啓発を進めていきたい。

当初予定では「子育て支援コーディネーターと生活支援コーディネーターなどの連携に着手し始めた自治体を、地域まるごとケア先進自治体として調査」の予定であったが、利用者支援事業・特定型を進める自治体が多く、地域連携を生活支援コーディネーターとともに行える環境にある自治体は数少ない。これまでと同様、地域包括および子育て世代包括ケアの先進自治体であるとともに、厚生労働省の「我が事・丸ごと」地域共生社会推進本部が進めようとしている地域福祉計画策定と推進の努力義務化に伴う形で、地域自治による地域福祉計画の推進を図ろうとしている自治体をピックアップ、多職種多分野の地域連携の実際を探っていく。

地域連携による地域まるごとケアの周知と啓発のため、地域福祉人材の交流をも兼ねた勉強会を複数回、場所を変えて開催。人が集まりやすくカウンターパートがいる自治体を選ぶ。

・第 2 期プロジェクトメンバー：にっぽん子育て応援団運営委員
高祖常子（NPO 法人児童虐待防止全国ネットワーク理事）
鶴見梨絵子（日本労働組合総連合会生活福祉局）
山田麗子（遊育編集長）
にっぽん子育て応援団事務局
青木八重子、當間紀子
アドバイザー：牧野カツコ（にっぽん子育て応援団運営委員 NPO 法人高齢社会をよくする女性の会）
アシスタント：葦澤美也子、新真依子

＊地域まるごとケア：東近江市永源寺診療所所長の花戸貴司さんが、三方よし研究会が目指すものとして掲げているのが「地域まるごとケア」。「年老いても、認知症になっても、独り暮らしであっても安心して生活ができる地域」を作るには、「我々専門職が提供する「地域包括ケア」と、非専門職が支えあっている「互助」を地域の中でつなぎあわせること」、さらに「これらのスキマをうまく埋める「地域まるごとケア」ができれば安心して生活できる地域になると信じている」。にっぽん子育て応援団では、「地域包括ケア」を赤ちゃんから高齢者まで、地域で暮らすすべての人々に向けた取り組みとしようという目標を掲げていることから、花戸さんの許可を得て、今回の 3 年間の取り組みで目指したい姿として、「地域まるごとケア」を使うこととした。

開会挨拶

公益財団法人さわやか福祉財団理事長
清水肇子（しみずけいこ）

皆さま、こんにちは。さわやか福祉財団の清水肇子と申します。どうぞよろしくお願い致します。

私どもさわやか福祉財団は、子どもから高齢者まで、たとえ障がいがあっても認知症になっても、それぞれの尊厳を認め合いながら、ふれあい、助け合い、みんなで関わりながら生き生きと輝ける社会をつくっていこう、という取り組みをこれまで続けてまいりました。そして、にっぽん子育て応援団さんは、「にっぽんをもっともっと子育てしやすい社会に」と、本当にいろいろな活動をされてこられました。子ども・子育て・子育ち支援といっても、まさに暮らし、地域のことだよね、高齢者のところから、あるいは今回は防災のところ、命というところを考えて、幅広く連携し合いながら、地域の形というものを皆で考えていこう、という取り組みをされていらっしゃいます。私どもが元々目指している活動と全く同じ取り組みということで、直接的に 2015 年からは委託という形でご一緒に取り組みをさせてもらっています。

今回、日曜日のご多用の中、そして近くの素晴らしい日比谷公園や話題の日比谷ミッドタウンなどの誘惑にも負けずに、これだけの皆さんが熱く深く考えていこうと集まり、こうした時間が共有できることを本当に嬉しく思います。

会場の皆さんなら、地域で暮らすといえば共生は当たり前のことですよね。ただ、改めて共生社会と言われた時に、何が必要か。住民の皆さんが今、いろいろな考えを持って取り組まれています。私も各地回らせていただくんですが、共生と言うと、当然、つながりあう、共に生きるということですから、連携する、ネットワークということが大きなキーワードになってくるんですね。けれども、やはり一番のポイントは、連携する前に、その一人ひとり、個人の皆が、主体的に自立しているということが一番大切であろうと。これまでも個の自立は言われてきましたが、実態としてはどうでしょうか。自己の主張というか、非常に孤立孤独、あるいは自分自身にすごくこだわりすぎている、というところがどうも個の自立と誤解をされているきらいがある。全くそんなことではなくて、自分自身が大切に思えるからこそ、相手の方の尊厳をそれぞれ認め合える、ということになるんだろうと思っております。

高齢社会の問題で、介護保険制度の改正が行われています。全国各地で、住民の皆さんが参加しながら取り組みを進めていこうという地域づくりが進んでいます。各地を回ると、ちょっと前までは、子育て分野の方々から、「高齢者介護、高齢者支援ばっかり充実していて、なかなか子育てのところが注目されないし、もっともっとやって欲しいんですよ」という思いをたくさんお聞きします。今は、少しずつ制度も進み、行政の方、首長さん、子育て支援に力を入れているところが増えています。とてもいいことですね。けれども一方で、地域の方によくよく話を聞いていくと、今度は高齢分野の方が「いやぁ、うちも過疎だし大変なんですよ」と。首長さんは、子育て支援って言ってるけれど、「それは本当に必要なことだけれども、もっともっと地域全体のことを考えてくれないかな」と、そんな声も出てきています。

子育て支援、子育ち支援というのが、それこそ移住であったり定住であったり、突き詰めて言えば人口、数の問題になってしまっているところがある。一方で、「そんなことじゃないんだよ。子どもも高齢者もいろんな世代が交わり合って考えていくことが、これからの地域づくりなんだよね」と、進めている自治体も増えてきています。まさにそういう考え方に共感し、実践してくださっている方々が今日この場にお集まりにくださっていると思います。

これからの「自分ごと」の地域づくり、まずは自助。これは単に、できないことまで押し付けるということではなくて、自分自身で幸せになろうとする力とでも言うのでしょうか。でも人は弱いですから、なかなかそれをずっと一人だけで進めていくことは難しい。そこにお互いさまの助け合い、互助があるのだと思います。この自助と互助がつながりあっていく、つながっていく力とそれをつなげていく力の構築が必要です。地域づくり、共生社会というのは共感がないと進んでいきませんし、共感というのはお互いの思いやりが基となります。そこをいかに意識的につくっていくのか。それを子ども分野も高齢の方々も、皆でつながり合いながら新しい取り組みとして発展し、推進していただけたらと思っております。私どもも全国の皆さんとご一緒させていただきながら取り組んでおります。

このあと、素晴らしいご講演、パネルでの事例発表があります。それらを、皆さんお一人お一人の中でお持ちの課題解決へのヒントとしてお持ち帰りいただき、あるいは会場からのご意見ご質問等も出していただきながら、これからの日本の新しい地域づくりを一緒に発信していける機会となりますことを願いまして、簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。本日はご参加いただきましてありがとうございました。

基調講演
「赤ちゃんからお年寄りまで、誰一人孤立させないまちづくり 豊中 CSW の活動から」

社会福祉法人豊中市社会福祉協議会福祉推進室長
勝部　麗子
（かつべ　れいこ）

1987 年（昭和 62）年入職以来、ボランティアセンター、小地域福祉ネットワーク活動、当事者組織など、地域組織化や地域福祉活動計画に携わる。2004（平成 16）年度より始まった、大阪府地域福祉支援計画のコミュニティ・ソーシャル・ワーカー（CSW）設立事業の一期生となる。
現在は、CSW として制度の狭間の課題を解決するプロジェクトの立ち上げ等に取り組んでいる。また、厚生労働省社会保障審議会「生活困窮者の支援の在り方に関する特別部会」に委員として参加。
2014（平成 26）年 4 月から放映の NHK ドラマ 10「サイレントプア」のモデルとなり、同ドラマの監修を務めた。7 月には「プロフェッショナル仕事の流儀」に出演した。
2016 年厚生労働省地域力強化検討会委員として参加、2017 年より厚生労働省生活困窮者自立支援及び生活保護部会委員として参加。

ご紹介いただきました、大阪から参りました勝部と申します。よろしくお願いします。
（司会の）奥山（千鶴子）さんと、今ご紹介いただきました（厚生労働省の）地域力強化検討会でご一緒させていただきました。「我が事丸ごと」という話になりますと、いろいろなことを言われまして、「そんなこと言うな」「わがこと、まるごと、きれいごと」ですとか、「ひとごと、丸投げばっかりされても困るよな」なんていうことも言葉のところで言われました。
われわれのまち、豊中では、昨年の 6 月 18 日に大阪北部地震で大きな被害を受けました。震度 5 強の災害でした。24 年前に阪神淡路大震災がありました。そのときに私たちは知っている人たちしか助けることができなかった。まちぐるみで、本当に一人も取りこぼさないことを、どうやったらできるのか考えながら、地域づくりをやって参りました。実際にその中で、いろいろな方々のサポートがあって、地域ってなんとなくあるものと思っていたんですけれど、意図的につくらないと人と人って群れていけない、つながっていけないということを強く思うようになって進めて来たなかで、われわれのまちの 2 回目の災害になりました。ちょっとこれを見ていただこうと思います。
（NHK「あさいち」2018 年 12 月 13 日放映 「大阪北部地震　迅速な安否確認　その理由は」 阪神淡路大震災の教訓を元に進めて来た豊中市の取り組みを紹介）
地震発生直後 4 時間で、豊中市内 1 万 2000 人の人たちの安否確認をすることができた。これは小学校区ごとに、民生委員、福祉委員というのをつくっていまして、災害が起きたらすぐに見守るというのを、平成 14 年からずっと訓練をし続けていました。地震発生直後から、揺れたら、見に行くというのが習慣になっている。今回 7 時 58 分に災害がありましたが、8 時 17 分に災害対策本部を立ち上げて、そのあとすぐに「見守りを始めましょう」ということで、地域の方々に連絡を取るんですが、その時点ではみんな、もう動いていた。こんな地域づくりをどうやって進めて来たかということを、今日はお話しさせていただきたいと思います。

大阪北部地震。（部屋の中で）タンスが倒れて（足の踏み場もない状態になって）いるというのが多かった。もちろん高齢者だけのお家だけじゃなく、母子家庭や、障がいのある人たちが、タンスの下敷きになるんじゃないか。一番心配していた中のひとつが、いわゆるゴミ屋敷で暮らす人たち。家の中に元々物がたくさんあるわけですから、どうなるのか？ということで、みんなですぐに見守りを始めた。直後から、みなさん家庭訪問という形で見守りに回ってもらいましたけれど、外国籍の方もたくさんいるので、6 カ国語の情報提供の書類を作って、地域の方に各地を回っていただくように動きました。
発見をすることを地域住民でやって行って、次は解決をしていくということになります。解決のほうで活躍した人たちが、このあとのほうでお話をさせていただきます男性ボランティアの方々。これは 2 年前から、宅地を使って農業を始めて、そこで定年退職後の男性の方達の居場所づくりを始めました。今は 100 人を超える人たちが参加してくださっています。その人たちが平日の昼間、人を助けるということになったときに、タンスを外に出したりとか、エレベーターが止まっていますので、階段の上り下りをして、安否確認をするわけですけれど、最大 1 週間くらいはエレベーターが止まる中で、（被災した人たちを）どうやって支えるのかということも、いろいろ考えました。
もうひとつが、9 月 4 日です。丸々 8 月末まで地震の対応に明け暮れて、いよいよボランティアセンターを締めようか、平常業務に戻そうかというところで、今度は風速 55 メートルの台風 21 号がやって来た。かなりの屋外の被害がありました。私の家も屋根が飛んでしまい、その画像が YouTube で流れていたという（会場どよめき）、本当に大変な思いをしました。何が大変だったかと言うと、屋外被害はだいたい屋根が飛んだ、瓦が飛んだ、壁が飛んだという状況が続くんですけれども、一番困ったのは、屋根よりも何よりも、停電でした。都市生活の中で、長いところでは 10 日間くらい停電が続いた。エレベーターが止まります。水が上がらない。ポンプアップできないということで、断水が続きます。情報はすべて携帯電話でとっているという方が多いわけですけれど、充電できないということで、大変問題がありました。この辺りのことについては、紙ベースでしか情報提供できませんので、地域の住民のみなさんと一緒に、ローラー作戦で、停電地区を 1 軒 1 軒回らしていただきました。お風呂に入れない人は、地域の保育所、高齢者施設、障害者施設の中で、お風呂を提供してくださるところをリストアップして、情報提供して応用するということを行いました。
災害支援ボランティアセンターの開設。東日本大震災被災地に、

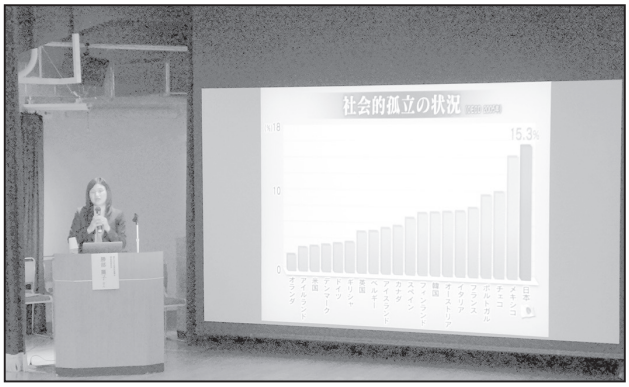
今もボランティアバスを出させてもらっていまして、高校生たちを連れて行っています。彼らと定年後の男性が、今回の活動ではかなり頑張ってくれました。

地域共生社会の話をしますと、よく「昔はよかった」という話を聞きます。本当に昔はよかったのか。よくよく考えると、私は決してそうでもなかったんじゃないかと思います。確かによかった面はあるかもしれませんが。向こう三軒両隣とよく言いますけれど、本当にその人たちの中で、障がいのある人が街の中で受け入れられていたのか。ご近所に内緒にして、ずっと家の中に閉じ込められていた障がい者たちがいます。認知症になっても近隣の人たちに知らせないで、ずっと閉じ込められていた人たちも、確かにいたはずです。そう考えますと、ただ単に近隣の付き合いが元に戻るとか、自治会町会の組織率だけを上げればいいということではなく、やっぱりわれわれは、ひとり一人が大切にされ、人権がちゃんと尊重されるような社会に、もう一回作り変えて行くということを意図的にやる必要があるんだろうというふうに思っています。
わたしたち豊中では今、4 つのことを地域共生社会のテーマにしています。
ひとつが「一人も取りこぼさない」。本当に一人も取りこぼさないということが出来るのか、という話もありますが、やっぱり困っている人は SOS を出せない。そういう人たちに届く支援になっているのか、考え続けています。
ふたつめが「排除ではなく包摂へ」。要は「総論賛成、各論反対」の問題がいっぱい起きているわけです。自分の家の隣りに児童相談所が出来たら困る、ですとか、保育所が隣りに出来たら子どもの声がうるさい。グループホームが出来るとなると、たちまち住民の反対運動が起こる。これって障がい者の人たちを差別しないということはわかっていますが、実際に何か起きると、その人たちのことを知らない、実際に出会ったことがないので、そういう問題が人ごとになって、「私の家の隣りじゃなくていいんじゃないんですか」という話。総論賛成から各論賛成にしていくためには、一個一個の個別事例から、その人と出会ったことでちゃんと理解をしていくようなまちづくりをしていくということを目指して、平成 16 年からコミュニティ・ソーシャル・ワーカーという事業の中で、A さんの問題を通じて地域の人たちが一緒に心を寄せながら、まちづくりをしていくという手法に変えて、支えることをし始めています。

もうひとつ大事だと思っていることが、「支えられていた人が支え手に変わっていく」ような、役割が固定していないということですね。定年後の男性というのは、どちらかというと一時期はお荷物のように言われて、産業廃棄物だとか、濡れ落ち葉だとか、いろいろ言われていた時期がありましたが、彼らは今、私たちの街

では、とっても重要な役割を果たしています。この災害時には、引きこもっていた若者たちが、生活困窮者自立支援事業の中で社会参加をし始めて、平日力があって荷物が降ろせる。彼らはとっても役に立って、地域を支える側に回っているわけです。
こんなふうなことを、意図的にお互いを理解し合っていくことを目指してやっています。
そして最後が「すべての人に居場所と役割を」。どんな人たちも、自分が居ていい場所があって、そこで自分の役割を見出せるように。そんなことを、地域共生社会という中で、実現していきたいということを考えて、進めて参りました。

大阪府では平成 16 年に、全国に先駆けて、コミュニティ・ソーシャル・ワーカーという専門職を配置しました。制度の狭間の問題を受け止めるというワーカーです。これまでは高齢者福祉、障害者福祉、児童福祉、生活保護と。「64 歳の人はどこには当てはまるんですか？」とか、障がいの病識がなくってご自身が障害者手帳を申請していなかったとか、みんなこぼれ落ちて行く。引きこもりなんて、誰が対応するんですか？ 「働きたければハローワークに」、行けないから問題なんです。そういう人たちはみんな（狭間に）滑り落ちていた。そういうところをしっかり受け止めるという専門職が、大阪でスタートしました。
これ今、「断らない福祉」ということで、生活困窮者自立支援など、それぞれのところで始まっています。関東では地域福祉コーディネーターというような名前で、受け止めることを始めたわけです。個の問題から地域づくりを始めると、どうもゴミ屋敷、子どもの貧困、引きこもり、8050、アルコール依存、刑余者などなど、今まで表舞台に出て来なかった問題が、どんどん我々の身近なところにあって、それは誰一人自分から SOS を出せない人たちがたくさんいるんだということが、見え始めました。



今、日本が先進国の中でダントツ 1 位なのが、これ（社会的孤立）。これは家族以外の人と話す相手がいない人の割合です。15.3%ということで 1 位ですね。イギリスは 5%ですが、昨年孤独担当大臣が出来ました。孤独による社会における損失がとっても大きい。孤独だから虐待が止まらない。子どもに手を挙げても、罵声を浴びせても、止めてくれる人がいない。自分が子どもに虐待をしていても、「ちょっと落ち着いて」と言ってくれる人が周りにいるとか、子どもをちょっと抱いてくれる人がいれば、そこまで進まなくていいかもしれないけれども、（そういうことをしてくれる人が誰もいなくて）そういう人たちがたくさんいる。孤独だから自殺を止めてくれる人がいない。孤独をそれぞれ別の話じゃなくて、ゴミ屋敷や自殺などの問題の中心に、社会的孤立ということが非常に大きな問題ではないかということを思うようになりました。
先日私たち、依存症のシンポジウムをやらせてもらいました。日本ダルク代表の近藤恒夫さんにお越しいただいて、薬物依存の

話をいろいろ聞いたんですが、（元シャネルズで、現在は日本ダルクスタッフ）田代まさしさんもいたんですね。マーシー（田代まさしさんの愛称）が、「薬物が止められないのではなく、孤独から抜けられない」と言うわけです。結局刑務所に入ると、同じ房の人がヤクの売人と一緒にヤクをやってた友達とで、作業して帰ってくると、「今度（薬を）どこで買えるかな」という話をしていて、これで自立できるのかというようなことを、彼もサービストークでしゃべってくれました。やっと刑務所を出たと思った瞬間に、家は借りられない、家族はいなくなっている、仕事もない。これでどうやって自立するんですか？という気持ちになったというお話で、やっぱりそうだなと思うわけですよね。
社会的孤立というのを、どうやって我々が埋めていくか。いろんなこと、違う花に見えている、いろんな出方になっている課題の根底のところが、人と人とのつながりの弱さということが、非常に大きな問題になっているのではないかというのを思い始めました。
そういう意味で、今、地域づくりということが大きなテーマになっていますし、アウトリーチというのも大きなテーマになっています。本当に困っている人は自分から相談に行けない。だからアウトリーチしていって、自分で SOS を出せない人たちを、どうやって見つけ出していくか。これは専門職がどんなに優秀であっても、一人で出来る数は限られています。われわれには 38 の小学校区があって、そこに 200 人ずつくらいのボランティアの人たちが日常的に見守りをしていて、そこから発見して、我々のところに相談が来るような体制を作っているわけですが、それでも困っている人、自分から相談に来ない人たちのところへは、こちらから出向いて行くという方法をとらないと、自分から困り感がなかったりすると、自分からは相談には来ないということです。
もうひとつは、そういう地域づくりをしていかないと、見守りをしてくれる人たちが街の中にいなければ、どうやって課題を発見できるのか。よく言われるのが、凄く立派な美味しいレストランが山の頂上にあっても、知ってる人しか行かない。だから素晴らしい専門職がいる相談窓口が山の上のほうにいくらあっても、そこまで上り詰めていこうという人はよっぽどの人たちなんだ。だから、麓まで降りていく、麓から伴走して連れて来てくれるような人たちをどのくらい増やせるか。我々は専門性を高くしていくことと同じように、そういう人たちを創っていくという地域づくりが重要なんだろうと思われます。

家族がちっちゃくなっているということは、みなさんよくご存知だと思います。核家族が広がっているわけです。わたしたちの街の核家族率はどこも高い。高齢者は二人で暮らしている。どちらかが亡くなれば、一人暮らし。3 人に 1 人は一人暮らしになっている。「お父さん、ちょっと電気の交換して」と電球交換。椅子に登って電球交換するときに、登るときはいいけど、降りるときに椅子がぐらぐらして、ばたんと落ちる。これはかの有名な電球交換骨折（会場笑い）って、全国ではやっているわけですけれど。でも、お父さんがいたときには頼めたけれど、一人暮らしになりますと電球交換も出来なくなります。男性がひとりで残っていると家事が出来ない。家事が出来ないからといって、ヘルパーは来てくれませんね。家事が出来ないんじゃなくて「やる気がないんでしょ」と言われるわけですから。そうやってなかなか生活がままならないということもあります。
私たちの街、転勤族の街です。若いお母さんたちは、豊中に転居して来たら一番最初にファミリー・サポート・センターに登録に来るという人がたくさんいる。子どもがインフルエンザにかかったりすると、おじいちゃんが新幹線に乗って手伝いにくる。そうでもしないと家族を支えられないというのが現実です。もっと言うと高齢出産で、40 歳ぐらいで一人目を何とか生もうとなると、おじいちゃん、おばあちゃんの介護と全部重なって一人に幾つも幾つものことが重なって、厳しい状況になる人たちがたくさんいるわけです。
だからといって、じゃ近所か？という話なんです。豊中市も都市部ですから、自治会の組織率が平均で行くと 40%ぐらいに下がっているんですね。だからといって、近所の人に助けて欲しいか？というと、これもまた、難しいんです。お向かいの人と一番仲が悪いというのはよくある話です。近隣の人と生活の助け合いまでしていくという関わりはなかなか持ちにくい。というわけで、我々の街では、小学校区ごとにボランティアの募集をして、地域の中で助け合いをしていくという取り組みを、阪神淡路大震災以降、やってきたわけです。小学校区ごとに、民生委員児童委員さんはおられますけれど、それ以外に、例えば配食ができる人、サロンの運営が出来る人、食事づくりが出来る人という具合に、どんどん募集して、一小学校区にだいたい 200 人くらいのボランティアをつくってきました。
住民は見守りをやれということで、自発的に 24 年前目覚めたわけです。自分の街のことは自分たちで見守りをする必要がある。一番最初に誰を見守ったかというと、一人暮らしの高齢者。でも、一人暮らしの高齢者より、もっと大変かもしれんよ、老老介護の人たちという話ですよね。認認介護もいっぱいいるよ。近所で認知症の人同士が生活していて、会話もなんか充分解りあえているかどうかわからない、「あれ」、「これ」、「それ」と言い合いながら暮らしている人、いっぱいいるよね。これも大変だということで、老老介護も見始めた。
次に出て来たのがゴミ屋敷。
当時、平成 16 年頃って、わたしたちがゴミ屋敷の問題に取り組み始めた頃は、日本中は、ワイドショーのネタになっていました。「あなたはなんでゴミをためているんですか？」ってレポーターがついて行って、さもおかしい人たちというように祭り上げていくというのが、TV 番組で紹介されていた頃でした。
地域の方はご近所に心配な人がいるからというので、市役所に相談に行きました。市役所はどういう対応をするかというと、
市役所「その方は高齢者ですか？」
地域住民「60 歳くらいですかね」
市役所「ああ、高齢者じゃないですか。障害はありますか？」
地域住民「わかりません」
市役所「生活保護ですか？」
地域住民「持ち家ですからね」
市役所「そうですか」
困るわけですね。振るところないですからね。じゃあ仕方がないから、ゴミのことだからと環境局へと言われる。
環境局に行くと、「ご本人、それ、ゴミって言ってますか？」
地域住民「本人は宝って言ってはります」（会場笑い）
市役所「ご本人がゴミだと言ってないんだったら、捨てるわけにも行かないですね」
と言われていたのが、ゴミ屋敷問題です。だから、どこも解決できないわけです。誰も鈴をつける人もいないし、解決する人もいなかった。
地域の人たちは我が事と思い始めると、いろいろな問題を発見できるんです。今、いろいろな問題が世間で起きていますが、よくよく聞くと近所の人たちは知っている。「実はあそこは子どもがいつも夜中に泣いていた」「お父さんが大きな怒鳴り声をあげてい

たのを聞いていた」と、必ず知っている。どうして（手を差し伸べて）やらないか。地域の問題は解決するところがないからです。解決しないことを一生懸命探していると自分が疲れます。我が事と思う人がいっぱい問題を自分で処理しないといけないようになる。

ホームレスの人たちもたくさんいたんですね。当時、ホームレスの人がいると、心配して「ホームレスの人がいるんですけど、どうにかなりませんか」と市役所に電話をかける。すると市役所では「その方、公園ですね？　じゃ、公園みどり課に行ってください」

地域住民「あ、その方今歩き始めました。公園を出て道のほうへ行きました」

市役所「その道、国道ですか？府道ですか？市道ですか？」（会場笑い）

これ笑いますけれど、本当の話です。これ、管轄外のことはやらないですからね。管轄のところが対処する。これが当時の我々の街の現状だったわけです。

阪神淡路大震災から5年間かかって、この地域の見守り体制つくったんです。私、体制を作ったら一定成果が出て終わりだと思っていたんですが、ダメだったんです。発見というのは解決がしっかり伴わないと出来ないということなんです。そこでどうなったかというと、発見をして来た人たちがだんだん見て見ぬ振りをするようになっていったんです。一生懸命1万何千世帯も見守っていたはずなのに、いろいろ問題があるにも関わらず、発見しても解決のところ、あるいは相談として上がって来なくなった。

これは解決策のほうに問題があるだろうということになって、コミュニティ・ソーシャル・ワーカー、狭間の問題を引き受けます。高齢者のほうでは地域包括支援センター、今度は子どもの包括支援センター。何ごとも受け止めます。サービスがあろうがなかろうが、全部受け止めますというところがないと、発見だけ頑張れと言われても、出来ないということなんですね。発見と解決は車の両輪ということです。

そこでいろんな問題が見えるようになって来て、そこで地域の中での仕組みづくりが始まるわけですが、都会ですから、CS Wを置いたからと言って、何でも全部解決できるわけでもないですし、大事なのは、見守りは近所のほうがしやすいんですが、解決のほうは近所がやっていい場合と悪い場合がある。

引きこもりなんてご近所に知られたくないと思っているわけです。それを近所のサロンに連れて行くなんて、ものすごく嫌がられる。ちょっと離れた市でやるとか、もっと広域でやるほうがいい場合もある。あるいはLGBT、性的マイノリティーなんて話を近所の人にという話でもないし、同じ悩みの人同士が出会ったほうがいい。コミュニティを階層に分けて、本人にとって居心地のいい居場所をつくって行くということを、圏域ごとに進めて行くことを始めました。

事業所による見守りというのもやっています。電気、ガス、水道のメーターを見るとか、新聞配達員の方達も、みんな見守り協力員になっています。事業所の方々が、新聞がたまっていたら連絡して来てくれて、すぐに見守りにいけるようなやり方。多様な見守り体制で、地域の見守りをしているということです。

校区福祉委員会の活動の中で、子育てサロンなどもやりましたが、何でも相談というのもつくりました。厚生労働省の地域力強化検討会でも話題になりました。やはり、ご近所の問題を誰がどう受け止めるのか。市役所にも総合相談窓口がありますが、我々の街では、近隣の住民が受け止めることもやっています。住民の問題を住民が自ら考える、という場面です。

大変な、ビジュアルでわかる問題が次々と来ました。あの木がうっそうとしている家、ご両親が亡くなって、確か精神障害の息子がひとりいるはずだわ。そう言って訪問を始めたり、ゴミ屋敷のように見えることからやり出しましたが、今はそう言うわけにも行かず、もっと違う問題に巡り会いました。

（スライドの）この女性のところで3年前の秋に50代の娘が熱中症で亡くなりました。その後に、80代のお父さんの白骨死体が出て来た。年金詐称問題。これは凄く話題になりました。朝早くから、彼女（民生委員児童委員）のところには新聞記者などが殺到し、どんどんドアを叩く。「あなたは何故自分の担当エリアの人のことを把握していなかったのか」とやられたんですね。彼女は一人暮らしのお年寄りの家を毎月必ず訪問しているし、二人暮らしの方のところもちゃんと把握していた。泣きながら私のところに電話がかかって来た。「50代の娘が親の面倒を見るなんて、当たり前の家じゃないですか。こんなことで私の責任なんて言われたら、民生委員のなり手なんて無くなりますよ」と言われた。確かにそうだと思いました。でも、その方のお宅は袋小路の一番奥にあった。わざわざ行かない限りは見ることがなかった。自治会に入っていなかった。その娘さんが知的ボーダーではなかったかということがわかってきました。50歳の娘が80歳の親を介護していたという形態なのか、50歳の娘が引きこもっていて、親が面倒を見ていて、親が亡くなったあとに対応できなくて困っていたのか。主語が変わることで全然違って見えて来るんですね。これ、地域でどうやっていけばいいのか。

地域で話し合いが始まりました。ピンチはチャンス。24年前は阪神淡路大震災が地域の見守りを始めるチャンスになりましたが、今回は8050がチャンスになりました。みんなで話し合って、「ローラー作戦」、全軒回ってます。年間3000軒から4000軒。今年はもう5000軒以上回っていますが、自治会に入ってない世帯もあります。全世帯把握できていますか？と訊ねると、民生委員さんは「把握できていない。あそこの単身者用マンションは外国人が多くて、一体何語でしゃべったらいいのかわからない」「何カ国語話せるの？」「大阪弁だけ」（会場笑い）。どう対応していいのかわからないということですね。じゃあ、みんなで回っていこうと、みんなで回り始めました。

初めは半信半疑で回るんですけれど、100軒回ると5軒くらい問題があることがわかって来た。二人暮らしだったところが「主人は半年前に亡くなりました。家族葬で済ませてね」と、近所の人は誰もそのことを知らない。じゃあ、一人暮らしリストに登録しないと。次の家に行ったら、80歳のおばあちゃんが、一人でいる。食べるものがない、電気が止まったというので、生活困窮だ、大変だとみんなで食べ物を持って行ったら、「違うんです勝部さん。通帳にはお金あるんです」と。お金のおろし方がわからなくなっていた。認知症が始まっていたわけです。こういう人って自分でSOSを言いに行きますか？

この間訪問したのは、地域包括支援センターの職員と、私と、地域の民生委員さんと福祉委員さんでした。中から66歳の男性が出て来た。地域包括支援センターの新人職員が「何かお困りごとありますか？」と訊ねると、「なにも困ってへんで」。「あ、そうですか」と新人が帰りそうになったんだけれど、これで帰ったらあかんやろと思って引き止めた。すると下駄箱の上に独楽が置いてあったんです。「面白い独楽ですね」と言ったら、「見たいか」と。「見たいです」と言ったら、「中へお入り」と家の中に上げてくれた。段ボール10杯くらい独楽があるんです。一体これはなんだろうと思って聞いてたら、6年前に母親が認知症になって介護離職した。母親を介護して1年で母親が亡くなった。それから6年間誰ともしゃべっていなかった。「死んだもんはいらんけど、さみ

しかった」と言っていました。この人は介護保険使う人じゃないです。今はこの独楽回しを教えに、こども食堂に来ています。人のつながりがないということですね。

我々福祉の専門職はサービスにつなぐことばっかりやって来たんだけれど、人と人とをつなげることに、もっともっと関心を持つ必要があるなということも思います。
（スライドの）こういう問題を発見すると、地域福祉ネットワーク会議というところで話し合いをします。ここは第二層の協議体にも位置づけられているので介護保険のことも関わるんですけれども、高齢、障害、児童の施設、市役所の関係者、エリアの担当者と地域住民が一堂に会して、話し合います。この間も話し合っていました。ある地域で買い物困難の話があった。「どこかに移動販売車を置きたいんだけれど、どうしたらいいんだろう」「じゃあうちの保育所の駐車場使ってください。昼間の時間空いてるから」そうすると、高齢者の問題だけれど、児童の施設が応援してくれたりとか、障がい者の作業所さんが「うちのパンも持って行っていいですか？」という話にもなるわけです。そんなふうにして丸ごと解決していくと、そこの生活課題が解決できていくっていうことを話し合います。それでも解決できない問題は、市の課長さんが集まるところで、お話し合いをしていきます。
徘徊 SOS メール、徘徊する高齢者の問題を一斉送信でメールで配信して、街ぐるみで探そうというやり方ですね。メールを配信するからということで、地域の高齢者の方々に携帯電話で配信しますからというと、まず、みんな登録できない。若い人が出来るから、子育て中のお母さんたちに登録してもらって、ご近所見て回ってもらうだけのことなので、ご協力いただけたらということで、斜めがけというようなことをやって行くことで、支えていくことが実際に出来ます。いろんな問題、高次脳機能障害だったり広汎性発達障害だったり、心の問題だったり。こういうことを仕組みにして解決していきます。

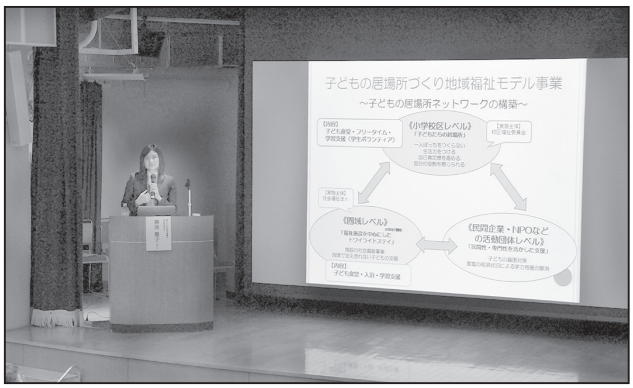
小地域の活動ということで、校区ごとに活動しているわけですけれども、拠点をどんな風に作っているか。地区会館を使っているところはもちろんありますが、豊中市では、空き家を使わせてもらうと、無償で借りる場合に関してだけ、貸し主の固定資産税を減免しています。転勤族が多いので、退職まで帰って来ませんというおうちがあるんです。そういうところを、みんなでねらいを定めて、お願いしに行くということをしています。
マージャン教室。（スライドを）見てください。5 卓出ていますが、全部女の人。（会場笑い）何でも相談もやっています。食事サービスも、みんな女の人なんです。男の人はどこに行ったのか？男の人は、食事サービスは食べたら、みんなすぐに帰ります。（会場笑い）べらべらしゃべるのはいやや、と。サロンに呼んでも、女性に圧倒されて来ません。カラオケも、2、3 回来て、女の人がうわーっと増えたら男の人はもう来なくなる。では男の人はどこにいるかという調査をしました。お金のある人はジムにいました。それから図書館。朝早くから行っている。そして犬の散歩。最近はイオンモールを歩いてます。（会場笑い）雨の日も暑い日も寒い日も歩いている。男の人は誰とも群れていないことがわかった。
男の人をどうやって群れさせようかと考えたのが、「豊中あぐり」です。アグリカルチャー、農業なんですけれど。豊中全体で、マンションに住んでいる人たちは 66%なんです。だから庭がない。元々宅地だったところを、私の講演を聴いた人が「貸してあげる」と貸してくれた。1 坪 100 万円の土地、120 坪。1 億 2000 万円の土地を無償で借りています。そこでみんなできゅうりを作り始めた。定年後のサラリーマンの人たちを集めました。
いわゆる一坪農園というのはいくらでもあるんですが、これは群れない。隣りと競争し合います。隣りがきゅうりの花が咲いていたら、うちもきゅうりが出来るかなと始めるんですけれど、どうやってつくるか聞けばいいんですが、聞かない。どんな肥料をやっているか見て、真似してやったら、枯れた。よくある話です。
お互いに群れさせるということを考えたんです。ここでは共同です。競争社会は終わった。地域社会ですから、みなさん一緒にやりましょう。「何を植えましょうか？」「はい、わたしはなすびがいいです」「はい、わたしはきゅうりがいいです」みんなばらばらなんです。終いにはひとり 50 センチずつ土地を分けてくれと。そうして競争させれば生産性が高まるとまで言い出した。（会場笑い）水やり当番を決めましょうというと、「水やりは、持ち帰って検討する」という感じで、なかなか上手く行かなかったんですよ。ところが、みんなで共同作業をやってくださいと、「みんなで流し素麺をやろう」という話をして、「あとは知りません。みんなで考えてください」と、私はそこから姿を消しました。そうすると CAD で図面を描き始めた人が現れ、竹を取りに行く人が出て来た。素麺の湯がき方を一生懸命練習して、糖尿病なのに、そんなに素麺食べていいのか？というくらい熱心にやって、流し素麺が出来た。やり出したら、みんな血糖値が下がって来た。動くこと、野菜を食べること、ストレスを発散することで、これは理にかなっているそうです。諏訪中央病院の鎌田實先生がおっしゃっていました。
みんながどんどん元気になっていくと、これがまた面白いということになって、この人たちは 2 カ所目を借りられることになったので、その場所を使って田んぼをつくった。
（NHK あさいち　2018 年 12 月 13 日放映　災害時に大活躍　地域の「男性パワー」

豊中あぐりの活動を紹介　大阪北部地震被災後、1 日数十軒の家を訪ねて家財道具を運び出したり、後片付けをするなどの力仕事。現役時代のスキルを活用して、配線修理やラジオ修理、家屋修

理など。東日本大震災で知り合ったボランティアグループはドローンを使って屋根の被災状態の確認も）
もともと豊中あぐりの人たちには、野菜づくりと地域福祉の勉強をしていただいていました。福祉便利屋（15 分 200 円で家の片付けなどを行う有償ボランティア）という活動をやっていただいていたんです。災害時にすぐに活動を展開できました。引きこもりの若者たちも参加してもらいました。若者たちには就労支援の活動としてやっていただいています。
買い物困難地域でしたが、空き店舗を活用して（び一の×マルシェを開店）。豊中あぐりの生産物を販売。イモ焼酎も作りました。
（NHK　TV シンポジウム　2017 年 11 月放映　都会の真ん中で農業　地域の拠点づくり）
こんなふうにして男性の居場所づくりから地域の人材づくりと言いますか、地域の担い手として、居場所から役割ということで、活躍をしてもらっています。

マンションの問題が今回の災害ではとても大きな問題でした。マンションサミットというのを始めてまして、自治会に入っていない人たちは、マンションサミットでつないでいます。管理組合の人たちに集まってもらって、「無事ですシート」、無事だったときに「無事」というマグネットシートを外に出すというので安否確認がうまく出来たので、それを普及しながら、マンションのつながりづくりを今、広げています。

子どもの問題を少しお話しさせてもらいます。
こども食堂が全国的にも広がっているわけですが、要対協（要保護児童対策協議会）、いろんな課題を抱える子どもさんについては情報を機関で共有できるんですが、グレーゾーンだったりとか、心配な子どもさんについては、なかなか情報が学校から外に出ることがなかった。私たちのところでは、コミュニティ・ソーシャル・ワーカーがいることが、学校にもわかっていますので、学校の先生たちが何かちょっと心配だなと思うことをどうやってつないだらいいのかなと、いろいろと話し合いました。
あるとき中学校の先生から、昼食の時間になると外に出て行く生徒がいる。豊中市の中学校はまだ給食じゃない。お弁当です。「どうした？」と訊ねると「ダイエット中」と応える。次の日も、その子は出て行く。なんかおかしいと、先生のお弁当を食べさせた。ものすごい勢いで食べた。どうもおかしい。先生からご相談いただいたので、その子のクラブが終わる時間帯に私たちが学校を訊ねて、その子から話を聞かせてもらうことになりました。
フードバンクを立ち上げることになりまして、明日（2 月 18 日）、ダイエーと提携をむすぶことになっています。フードドライブですね。食品ロスを防ぐために、社協で全部受け入れるということを始めますけれど。そのフードバンクから食品を持参して、子どもを訊ねていきました。彼女はお菓子を凄く食べました。「持って帰る？」って聞いたら、「持って帰らない。盗んだと思われるから」と言うわけです。
「お母さんに会わせて欲しい」「お母さんすごく頑張って働いているのに、お金がないみたいやねん」。3 人家族で、一日 1 合炊いて食べてるという話なんです。「大丈夫。私たちはローラー作戦やってるから、あなたの家の近所にローラーで行って、あなたのお母さんと会うから。お母さんと会って、私と顔があっても絶対知らん振りしいや」「ふん」という会話のあと、訪ねて行きました。ちょっと知的な問題があるかなという印象でした。市役所には相談に行ったことがあるけれど、上手く自分のことが言えなかった。それでもうダメだと思い込んで、ぎりぎりの生活をしていました。
彼女は、生活保護とかいろいろな手続きが出来たわけなんですが、彼女たちのためにその地区でこども食堂を始めました。
この子たちがごはんを食べられたり、学習支援が出来る場所をつくりたいということで、校区福祉委員会で働きかけて来ました。初めは「子どもの貧困なんて、そんなもの見たことないで」と言われました。それでも、こういう子どもたちがいるんだという話や、ともかくこの子たちを支えるようなことをやってみよう、子どものことを考える大人を増やしたいと説明しました。「お試しでやってみようか」と言うことで始まりました。親子が来てくれて、そこでごはんを食べていろいろな話をして、だんだん生活が改善されていくようになりました。彼女は勉強ができるようになっていった。伸びシロが凄いあります。平均点なんてグンと上がるわけですね。元々高校受験なんてお母さんはさせるつもりがなかったけれど、本人は高校に行きたいということになって、学習支援が始まりました。一所懸命学習支援しているうちに、どんどんどんどん勉強ができるようになっていく。



子どもの貧困には 3 つあると言われています。ひとつは経済的困窮。2 つめは人間関係の貧困です。3 つめは文化的貧困です。このうちは電子レンジでチンする生活しかしたことがないので、みんなで鍋を囲むというような暮らしはしたことがありませんでした。彼女の入試の日、近所のこども食堂をやっていた民生委員の方が、勝ち弁当を作ってくださった。トンカツ弁当。「勝ち弁いうんねんで。これ持ってったら勝つからな」と送っていかれたんです。彼女が合格発表の日、近所の人のほうがドキドキしています。そして合格だったことがわかったとき、ここのこども食堂はお赤飯に代わります。彼女からのお願いがありました。「勝部さん、ひとつお願いがある。私、高校に行ってからも、ボランティアしていいかな？」彼女は今、こども食堂でボランティアをしています。人から大切にしてもらったから、人に対して恩返しをしたいという気持ちになったと言ってくれています。
一人の人から地域を作っていく、一人の問題と直面したときに、その問題を通じて地域が変わって行くということが、私はとっても大事なことだと思っていて、子どもの貧困に対してどうしろと言われたときにはみんな冷たかったけれど、あの子助けるために頑張ろうやって言い出したら、変わっていくわけです。
で、やってみると、夏休みはほとんどお金を 500 円与えられているだけで、自分一人でごはんを食べている子がいっぱいいることがわかったり。（こども食堂のイベントで）すいか割りやってますけど、あぐりの西瓜を使ってます。あぐりは西瓜がよく取れるんですけど、すいか割りに向いています。皮が厚いからです。なかなか割れない。（会場笑い）子どもたちは、ブロックで売ってる西瓜しか見たことなかった。こういうのも、みんなで群れることで、自分のお父さん、お母さん以外の大人と出会うことで、ロールモデルができるということもある。そう言う意味で、高齢者も群れ

るところをつくる。子どもたちも。多世代で群れる場所を作って、つながりを作って、そこで自分の役割なり居場所を感じていくということを進めています。

千里ニュータウンの街で、高齢化率が 38%。あるとき役員さんが私に言いました。「高齢者ばっかりで支え合っている。若い人はおらんのかと言われるけれど、諦めてください。若い人はいません、この街には」と。でも元気な高齢者で、やることないって思っている高齢者の人たちがいっぱいいるかもしれない。そういう人たちにももっと出て来てもらいましょうと始めたのが、15 分 200 円の支え合い福祉便利屋です。ここでは住民同士、高齢者同士で、コンビニにアンケートボックスを置いて、全戸配布で配ったアンケートに、自分が出来ること、助けられることと、助けて欲しいことと両方書いて入れてもらって、ニーズを集めて、ボランティアを募っています。でも、若くないと出来ないこともあるので、ここで活躍しているのが、引きこもりの若者たちです。
生活困窮者自立支援という事業の中で、我々が支えることがなかなか難しかったのが、引きこもりの人たちでした。彼らの居場所と役割をつくるために、15 分 200 円で活動できる場所をつくりました。そして今や、40 人の若者が就職できるようになって、最近はその中の一人が近所の人に「お嫁さんを世話したい」と言われた。
彼らがどうやって居場所に出て来れて、どうやって社会参加できてるか。私たちの街も「びーのびーの」という名前で、引きこもりの若者の居場所を作っています。そこで今はまだ出て来れないですけれど、私に毎月 1 回詩を書いてくれているのが社会参加だという子が、詩を書いてくれました。

ふつう
みんながぼくらにいってくる
「ふつうになれ」っていってくる
ぼくらは「ふつう」になれないのに

「ふつう」というギブスのせいで
ぼくらはいっぱいきずついて
ひとりぼっちでないてきた
「かわれ」「かわれ」ってみんながさ
ぼくらにいってくるけどさ
ほんとにかわらなきゃいけないのは
ほんとにぼくらなの？

ぼくらはふつうにとどかないのに

（豊中市社会福祉協議会が進める　社会資源開発シリーズ②豊中びーのびーの　より）

こういう本（豊中びーのびーの）を作っています。本を作ったりものを売って、2 時間 500 円のお金を自分たちで稼いで、社会参加の費用として当てている。地域の中での困りごとを解決する。府営住宅の草引きをやったりとか、ポスティングの仕事をしたり、新聞配達をしたり、そしてお店（びーの×マルシェ）も彼らが担っていくということで、地域になくてはならない存在になっています。私たち、こういう仕事をする中で、どうやって早期発見の仕組みを作るのかということと、ひとり一人の居場所をつくっていくのかということ。支援が大事だと思って来ましたが、実は、役割づくりや、その人の居場所づくり、自分がここにいていいんだという場所をどれくらいつくれるのかということを考えていくことが、とても重要なのではないかなというようなことを思うようになりました。

いろいろなことを地域のみなさんと一緒にやって来ているんですが、私は大学を卒業してからずっとこの仕事をしていまして、阪神淡路大震災の頃、子どもがまだちっちゃくて、小地域の活動で、見守り体制を作っていて。ちょうど震災から 3 年、4 年経った頃、一度もう疲れ果てて、もう辞めようかなと思ったことがあります。私子どもが 3 人いるんですけれど、3 人とも別々の保育所で、朝 1 時間半（子どもたちをそれぞれの保育所に）配送して、夕方（保育所から）回収して帰る。それからまた、地域の活動って夜とか土日ばっかりなんですね。それで、ごはん食べさせてまた地域に行くという生活をしているうちに、ワーク・ライフ・バランスが崩れちゃって、もう働けないと思ったんですけれど、ある日、今日もまた夜会合かと。上手く行くばっかりじゃないですから。行っても全然感触ないときもあるし、「ああー」って思ってたらきれいな夕日がね、ずーっと降りて来て、「今日もきれいな夕日やなあ」と思ってると、前がゆらゆらして見えなくなって、涙で前が見えなくなって、車の中で、そこしか弱音を吐けないので、「お母さん、もう仕事辞める」って言ってたんです。そうするとちょうど年中になった次男が、「お母さんが辞めたら、寂しいなって思う人が増えるよ。増えると思う」と言いました。
私はそれまで社会福祉協議会という組織が人から問われたときに、何をやっているかというと、上手く言えなかったんですね。「貸し付けしてます」とかね、「赤い羽根の募金集めてます」とかね、「車椅子貸してます」とかみたいな言い方しか出来なかったけど、この息子の言葉を聞いたときに、「そうだ。私らは寂しいなと思う人を少なくする仕事をしてるんやな」と思うようになりました。ま、本人も寂しかったと思います。でも、そう考えたら、今社会的孤立がこれだけ叫ばれているときに、我々がひとりぼっちをつくらんという仕事をしていることは、ものすごく重要なことだと思っています。こういう運動をみなさんと一緒に、多様な方々と一緒に、これからも進めて行きたいですし、街の中で SOS を出せなかったり、困ってたり、どうしていいかわからんという人たちが一人でも少なくなるように、これからも一緒に頑張って行きたいと思います。
どうもありがとうございました。

報告と提案

「暮らしの中で育ち合う　命を守るコミュニティづくり」

地域まるごとケア・プロジェクトは 2015 年度にスタート、これまでに 29 自治体にヒアリング、13 自治体で地域人材交流研修会を開催してきました。どの自治体でも、発言し活動する市民と、市民の声に耳を傾け、市民に寄り添う施策を展開しようと努める行政マン、さまざまな分野をつなげるコーディネーターや市民活動団体の姿がありました。
2018 年度に地域人材交流研修会やヒアリングでお会いした 3 人の方に、これからご登壇いただきます。
共通するキーワードは、命と子どもと地域です。

報告者：
一般社団法人プレーワーカーズ理事　神林俊一さん
富田林市金剛銀座街商店会会長　美容室エメールヘア代表　木全剛司さん
上越市健康福祉部高齢者支援課副課長　細谷早苗さん

コメンテーター：
社会福祉法人豊中市社会福祉協議会福祉推進室長　勝部麗子さん

ナビゲーター：
にっぽん子育て応援団地域まるごとケア・プロジェクトメンバー
青木八重子（気仙沼市）
山田麗子（富田林市）
當間紀子（上越市）

○東日本大震災沿岸被災地を中心に遊びとつながりを通じた子ども・子育て支援

一般社団法人プレーワーカーズ理事
神林俊一さん
（かんばやし　しゅんいち）

いじめ・不登校の渦中、冒険遊び場に出会う。2010 年度、東京都次世代育成事業にて、チャイルド・ファシリテーターとして子ども 300 人、乳幼児親大人 100 人をヒアリングし自己肯定感・自尊感情を調査。2011 年 4 月、東日本大震災直後、宮城県気仙沼市で子どもの居場所「気仙沼あそびーばー」を立上げ現場コーディネーターの後にプレイワーカーとして 4 年半関り現地に運営を引き継ぐ。その後、日本ユニセフ協会との協働により東北三県の仮設住宅、復興公営住宅近くで移動型遊び場「プレーカー」を展開。震災以降およそ 7 年 10 ヶ月子ども・若者・親たちと関わる。2015 年、子どもが関わる全ての場所へプレイワーク（子どもの遊びに関わる専門分野）を伝えるため一社）プレーワーカーズを設立。地方創世戦略会議委員、気仙沼市子ども子育て会議委員 1･2･3 期など歴任。

青木）神林さんのご紹介をさせていただきます。私どもの本年度の事業「地域人材交流会 in 気仙沼」でお世話になりました神林俊一さんです。一般社団法人プレーワーカーズ理事。一般社団法人プレーワーカーズは、震災後、東北三県で子どもたちの遊び場づくり、また子どもたちが遊びの中ですくすくと地域に見守られて育つ環境づくりに注力してきました。神林さんは元々、東京のご出身で、2010 年東京都次世代育成支援行動計画のまとめで、チャイルド・ファシリテーターを担当。東日本大震災の後、NPO 法人日本冒険あそび場づくり協会の被災地支援事業の一環として、気仙沼に住民協働の子どもの遊び場「あそびーばー」立ち上げられ、同法人の宮城県北部支部長として日本ユニセフ協会と協働、東北各県の仮設住宅や復興公営住宅の近隣に遊び場を移動遊び場として開催しつつ、住民主体の遊び場づくりを自治体や住民のみなさんと一緒に支援してきました。2015 年、子どもが関わる全ての場所にプレーワークの視点を伝えていくために一般社団法人プレーワーカーズを設立。現在は気仙沼でご家庭も持たれまして、神林さんから、中村さんになられたそうです。気仙沼での人材交流会では、社協の職員さんや民生委員さんを中心に、地域のみなさまがご参集くださいまして、子どもたち、「おらほの宝」である子どもの育まれる地域を、どのようにみんなで創っていくのか語り合いました。それでは神林さん、どうぞよろしくお願いします。

神林）いろいろご説明くださいまして、ありがとうございます。一般社団法人プレーワーカーズの神林と申します。ほかには NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会という団体のほうもやらせていただいております。以前から、にっぽん子育て応援団さんにお世話になっていたのですが、今回、気仙沼で「地域まるごとケア・プロジェクト」を、ということでお世話になりました。今回、僕は「子どもの部分から、遊びの部分から」ということで、地域の人たちと、どうやって協働して、共生していったのかという、ひとつの事例を報告させていただきます。それでは、よろしくお願いします。
まずは、僕自身が、今、ご紹介もあった通り、今年度結婚して中村という名前に名字が変わりました。（拍手）普段、子どもの遊び場の他に、乳幼児の子育て支援拠点もやっているのですが、何年も何年も、いつもお母さんたちが「結婚したときに名字が変わって大変」とか「手続きが追いつかないのよ」と言っていて。でも、どれくらい大変かよく分かっていなかったのです。「大変そうですね」と言いながら。僕も結婚するタイミングが来て、「そう言えば、このタイミングで僕のほうが向こうに行ったら分かるかもな」と思って、相手方に相談して、結婚を機に名前を変えたのですが、本当に大変です。結婚して半年以上経ったのですが、まだまだ手続きが追いつかない状態です。どんどん、どんどん見つかるのですよ。そういったところから、子どもができて、子育てしている最中に、さらにこんな事務手続きのいろいろなことをして、「それくらい。何で早くやらないんだ」と言われたら、こりゃ大変だなと思いながら、今はそういう身を味わっております。

僕自身は、気仙沼という場所に行って、あと 1 カ月で 8 年くらいになります。元々、東京都の世田谷区で過ごしていました。僕は小学校の時に不登校になったのですけれど、それ以来、小学校、中学校と学校に行かず、東京にあるプレーパークという居場所に出会いました。それから、その居場所に育んでいただき、まともに大人になることができました。その中で、東京都の方々や冒険あそび場、プレーパークの方々が、東日本で遊びを通じた子どもの心のケアということで、ひとつの事業を行ったのですけれども、それで僕は 3 月 11 日の震災以降、4 月 3 日に気仙沼を訪れることになりました。そのうちの仕事のひとつなのですけれど。向こうでひとつの居場所を作っても、そこに子どもが、そもそも来ることができないのですね。リアス式の地形なので山や海を越えるのは大変です。なので、こっち側から行ってしまおうよ、と。アウトリーチの視点ですよね。移動型のコンパクトな、遊び道具を満載したもので、子どもの遊べる場所まで行こうという事業で、移動型遊び場、プレーカーという活動をしはじめました。普段こんな車に乗っています。どこへ行っても、子どもたちや、地域のお母さんお父さんに見られるので、悪いことは絶対できないです。いつも、僕は車に乗っているときは笑顔です。少しでも疲れている顔をしていると、たまに見られるのですよ。気仙沼はとても狭いので、どこかで誰かのじいちゃんとか、自治会の人が見ていて、僕はかんぺーちゃんと呼ばれているのですけれども「かんぺーちゃん、なにか疲れてる？　大丈夫？」それを言われるのも、なんだか申し訳ない気持ちで、作り笑顔が得意になってくるような感じで。でも、いろいろな地域の方々に助けてもらいながら、移動型の遊び場をやっています。

これは（スライド）、普段よくやっている遊び場のシーンです。児童館や学童（保育）、または何もない場所、生協さん、あとは自治会さんや商店会、そういった所に依頼をされていくケースがあります。車の中は遊び場づくりの道具がぎっしりいっぱいです。
2 年くらい前ですかね。岩手県の遊び場なのですけれども、生協さんに依頼されてやった遊び場です。これは瓦礫集積所の横

ですね。（瓦礫の処理は）9 割は進んだと言われているのですが、まだまだ瓦礫が山積みの所もあります。国道だったり、バス通りだったり、メイン通りのところは（瓦礫の山は）無くなってきているのですけれども、そうじゃない場所、過疎地域、少子高齢化の場所は、まだまだ厳しい所がありますね。でも、あるとき、この子どもたちに、こんなことを言われました。「かんぺーさん、秋葉原とか原宿って、行ったことある？」「そりゃあ、あるよ。俺も東京に居たんだよ」と言ったら「へぇぇ。なんかさぁ。TV で私たちも見るけど、映画みたいだよね。あんなにお店とかあってさ、綺麗でさ、すごいよね」って言われて。僕たちが、逆に、こういった映像を映画のようだと思うように、向こうの子どもたちも（瓦礫が山積みの）これがまだ当たり前だと、インフラが整っている、当たり前のように綺麗になっている所のほうに、違和感がある。（震災被災地は）そうした場所なのだということを、子どもたちに教わりました。

そういった中で、普段、僕はこの気仙沼という場所で活動しています。気仙沼は、海と山に囲まれた場所です。震災前、とても素敵な景色の場所でした。

これが私たちの活動している気仙沼の本吉町という場所です。ここでこうした映像を見せるのも、何だろう、人によってはまだまだ癒えていない方もいるかと思います。これは僕たちの活動している場所の小学校の通学路です。

ここは子どもたちの住んでいる家、住宅街だった場所です。映像だけでは分からないのですが、津波の力というか、本当にどれだけの力があったのか分からない、ということを見せつけられました。

こういった（泥だらけの）学用品もありました。僕たちは 4 月 3 日に訪れたのですが、まさにこれから 4 月を迎えて、新しい学年、新しい学校に入っていくという中で、新品の学用品が沢山落ちていました。避難所に行くと、「あれは瓦礫じゃないよ。思い出なんだ」と言われることが度々ありました。割と支援者やボランティアの方は「瓦礫」という言葉を使いましたけれど、「瓦礫」という言葉はものすごく難しいなと、そのとき、思い知らされました。

4 月 26 日に住民の方々と、避難所の方々と、子どもの遊び場を開所しました。東日本大震災後、常設の遊び場としては最初にできた遊び場だと言われております。4 月 3 日から訪れて 6 日まで住民の方々と避難所の炊き出しですとか、最初は社協さんのボラセンの支援もしながらヒアリングを行い、4 月の 2 週目、3 週目に場所の候補地を探し、オープンしました。

僕たちは元々、冒険遊び場、プレーパークという活動を全国各地でしているのですけれども、徹底して住民主体で遊び場を作るという活動をしております。阪神淡路（大震災）のときにも、遊び場づくりの事例が伝えられる団体があったのですけれども、震災があると、住民が遊び場を作るなどということは、いきなりできるものではないのですね。まずは 3 カ月、また半年という時間をかけて、僕たちのほうで期間限定の遊び場を作ろうということで始まりました。

僕たちは、最初に「どんな遊び場作りたい？」と聞いたのですね。子どもたちは、「まず、滑り台作りたい」とか「ブランコ作りたい」とか、いろいろなアイデアが出ました。このひとつ前のデータなのですが、「じゃあ、どんな滑り台作る？」と聞くと、「えっ？作ってくれないの？」と言われるのですね。「えっ？作ってあげないけど」と言うとびっくりされてしまって「大人ってさ、そういうもの用意するものじゃないの？」「ボランティアの人って、大体、買ってくれたりしているよ。ゲームとかも届けてくれるけど、おまえら何できるの？」と言われて「いや、ごめん。そういうのを買うお金もないしさ、作ってあげちゃうこともなかなかできないのだけれど、一緒に応援くらいならできるよ」と言ったら「使えねーな」と言われて、「とりあえず、あれ、運んでくれよ」と言われて「分かったよ。でも、俺たちだけじゃ運べないから、一緒に手伝ってよ」と言いながら「そこまでできないのか」と言われて、「分かった。運んでやるよ」と一緒に材木を運ぶところからやりました。

僕たちの団体の活動としましては、僕も子どもの頃から教わってきたことでもありますが、徹底して「お客さんにしない」ということを大切にしています。支援という言葉は非常に難しいのですけれども、僕たちがついつい「支援してあげる」という立場になると、どうしても立場が上下になる場合もあります。だけれど、僕たちは本当にフラットだと思うのですね。なので「お客さんにしない」ということを徹底しています。とは言っても、僕は本当に何もできないので、丁度よかったのかな、と思っていたりします。こうやって子どもたちが竹を切ったりしながら、オープン直前に、小学校高学年や中学生の子どもがこういった遊び場を作りました。子どもたちの自己肯定や自尊感情の部分でも大きな役割を担ったのかな、とも思います。こうして、どんどん、いろいろな遊び場を作っていきました。

こうした遊び場づくりは、最初に言ったように、住民主体の遊び場というのをイメージしています。

震災から 7 年と 11 カ月ですが、この方々が今も遊び場を運営しています。この中で一番お若い方の年齢は何歳か分かりますか？とても失礼なので言えないですが、平均すると 70 代ですね。この方は第二第三の人生を今歩んでいます。おばあちゃん方は、普段農業をしているので、腰に鎌を持っていたりするのですね。たまに、中学生、高校生でヤンキーとか茶髪、金髪の子達が来ると、結構怒るのですよ。それが嫌で引きこもりになった、不登校になった、というケースが震災前も実は沢山あるのですね。それが田舎だったり、地方の文化だったりもします。でも、ここで 2 カ月、3 カ月経つうちに、最初は鎌持って、別に刺すことはしないけれども、つい癖で鎌持っちゃう人もいる。そんな人たちも、だんだんと「まぁいいから座れ。お茶飲め」と若い子たちにお茶を勧めるようになったりとか、そんな動きも出てきたりしました。

こういう方たちには、「自分たちが楽しむために、でいいのですよ」と僕は7年言い続けてきました。誰かのために何かをするって、簡単ではないのですね。東北には「お茶っこ」という文化があるのですね。お茶を飲んだり、地元の誰かの家に集まって、お茶菓子を食べたり。それをこの場所でやるだけで、子どもの居場所になるかもしれない。それくらいで子どものためになるなら、どうですか。という動きをずっとしてきました。この方々は、ただ「お茶っこ」を外でするようになるのと、ちょっと歩くだけなので、ここでするようになりました。
それからここで、いろいろな手作業などもするようになりました。「お茶っこ」のお金を作るために。世田谷のお母さんたちがしめ縄を作って、それをお金にするということを、僕の身近でやっていたのです。それをこちらの方々に伝えたのですね。そしたら、東北ではしめ縄とか作らないのですよ。イオンとかで安く売っている。でも、「よかったら、しめ縄作ってみませんか？」と言ったら「ああ、子どもの頃に作ったよ」と60年、70年前の文化が蘇ってきて。すぐにパカパカパカパカいろんなものを作るのです。こんな立派なもの。これ2回目ですよ。ワークショップで。こんなの作るんですね。やっぱり楽しいというのも大事だったりします。このときには、仲間づくりというのも、とても大事にしていて、「新しい方々増やしたいね」と言っていました。そうしたら、しめ縄を作るためだけに新しいメンバー、自治会には入っていない方々が参加していたりとか。（現地でも）割と自治会には入りたがらない人もいます。自治会の人に何か言われた経験があったりとか。何か重層的な問題が絡み合っていたりとか。でも、何かこういう遊びとか、こういうのだけだったら参加したいという方がいます。先ほど見せたこの写真の、この方は自治会長の奥さんなのですが、この方々の半分は自治会に入っていないのですね。むしろ、これまで自治会と対立構造があった方々です。田舎の言葉で「村八分」という言葉が、まだ生きているのですね。そういった、村八分状態です。あと「あそこの家には関わるな」。僕も、何度も最初の一年目に言われました。そういった方々が、今では居場所づくりを助けてくれています。

そうした経験を東北各地で30カ所以上、僕も関わってきたのですけれど、2016年、ある自治会からこんな依頼が来ました「あそびーばーのような場所を作ってくれ」。議員さんを通じて連絡があったのですけれども、これまで僕たちは、地元の方々で「やりたい」という人がいれば、そこの応援には行くのですけれど、「やりたい」と言う人が全く分からない場所で作ってくれと言われても、僕たちそんな作れるわけではないのですね。なぜなら、僕たちは何もできないのですよ。そこにいる人たちが何かしてくれれば、それを繋ぐこととか、お手伝いはできる。やりたいという人がいなければできないのですね。
なので、先ほどローラー作戦という話が出ていましたけれども、僕たちもローラー作戦しました。ここは300世帯くらいいたのですけれども、全ての所に僕たち生でヒアリングを行いました。「自治会に頼まれて、子どもの遊び場とか、多世代の居場所を作ってほしいと依頼があったのだけれど、そもそも遊び場づくりが必要かも分からなくて、もちろん、あったらいいとは思うのだけれど、みなさん、ちなみに子どもの頃ってこの町でどんな風に遊んでいましたか？」という話をしました。この地区は割と高齢化が進んでいるのですね。半数が60歳以上です。そうすると、「まぁまぁ。いいから、いいから」と言われて、1軒入ると入ったら最後、2時間3時間かかってしまいます。とりあえず、と言っていろいろな話を聞くのですけれども、子どもの頃の話を聞くと、武勇伝が沢山出てくるのですね。今では確実にグレーな話。ブラックに近い、オフブラックみたいな感じですわね。法律違反だったり。崖から解禁される前の海の幸を取っていたという60年くらい前の話とか。防波堤や波止場からダイブという話が聞こえてきたり。今ではダメな遊びばかりですよね。
でも、最初になぜこんなヒアリングをしたかというと、この30団体くらい8年間くらい付き合ってきた中で、いくつかの共通事項が見つかってきました。
それは3つあって、ひとつは責任問題ですね。子どもの遊び場を住民が作るといったときにケガや責任は誰がどうするか。2つ目は、お金をどうするか。3つ目。これが一番肝でした。「私はいいと思うのだけれど」「他の人はどうかなぁ」「他の人は許さないよ」。この3つ目が一番難しかった。なので、私たちはローラー作戦をしました。そう言われるのは分かっていたので。「私はイイと思ったのだけど」という話はきっと言うと思っていたのですよ。300世帯くらいの人に話を聞いて、全部まとめて自治会の総会でお話をして、役員会を通じて全戸に配布したのですね。通信にして。いくつか共通事項が見つかったうちの、9割の方が言っている言葉があったのです。それは、「この町のメインになっているこの川で、今は学校のルールで遊ばせてはいけないことになっているのですけれど、本当は遊ばせてあげたい」ということです。この地域は畑や山が沢山ある地域なのです。割と市街地なのですが、市街地の中でも、畑や川が割とある。街並みも新興住宅もあり、人口が一番増えてきている場所。でも、自然で遊べない。「自然で遊べないことは社会のルールだから仕方がないよね」と言いながらも、本当は遊ばせてあげたいという方がほとんどでした。

こちらの地域では、総会をして全戸に通信を配ったら、すぐに住民会議というものが開かれました。100人くらい来ました。65000人くらいの人口で、たったひとつの地域で100人来るって、とんでもないことですね。その中で「やはり遊び場が必要だと思う」と強く感じている方々も5、6名現れました。若い方々です。早速、遊び場を作ることになりました。そうしたら、話し合っている中で、宮大工の方や、業者の方、林業の方、自治会の役員、議員さん、PTA、ほとんどのステークホルダーが民間にはいるのです。この人たちがいるのなら、なんとかなるかと思って。本当に僕は何にもできないのです。何もできないから助けてください、と言って。子どもも含めて、完全フラットな話し合いを開きました。
民生委員児童委員さんなどもいるのですが、全く肩書のない地元の人も半数以上いました。それが結構大事だったりします。最初に1回目で民生委員児童委員、自治会の役員、いわゆる充て職の人たちを集めてしまうと、一般の人たちから見て「またあの人たちね」という文化がこの地域にはありました。そういう人たちには、先に根回しをして「（地元の役員スラスの人を集めるのは）2回目、3回目くらいから、やっておいたほうが、1回目は一般の人は多分

集まりやすいのですよね」と言いながら。そうしたら、すこぶる話が早く進みました。子どもたちは１回目の会議からいきなり来て、いろいろなものを作ったり。これは、開始してからすぐ宮大工さんが「遊具作ってやるよ」と、子どもたちと話しながら遊具を作ってくれたりしました。立派なものです。
僕たちはプレーワークの面から、リスクマネジメント的には気になることも沢山あるのですけれども、住民の人たちがやれるレベルで、やりたいことをやるというのが、ものすごく大事だったりします。その狭間の中で、僕たちは「こういう風にやるといいかもしれないですよ」とか「これってちょっと、どうなのですかね」とか、上手く伝えたりもします。

東北は寒いです。平気で最高気温がマイナスだったりします。これは大阪の羽曳野とか向こうのほうで習ったのですけど、ビニールハウスって最高なのですね。建築物じゃないのですよ。建築基準要らない。で、お金がかからないのですね。ビニールハウスを作って、住民の集まりやすい活動をしたりもしました。こうした、民間の人が集まって作るということで、勝部さんのお話ではないですが、結構いろいろなことが解決したりします。制度と制度の間をこぼれ落ちた人たちが、地域の中で解決することが実は沢山ある、ということを今回、気仙沼のほうでお話させていただきました。早口となってしまいましたが、以上とさせていただきます。ありがとうございました。

青木）神林さん、ありがとうございました。それでは勝部さん、コメントをよろしくお願いします。

勝部）神林さん、ありがとうございました。私が（豊中）あぐりを始めようと思ったきっかけは、実は、東日本大震災の支援に行き始めて、支援しているのだけれど、「われわれって家に帰ったらやることないよな。」と一緒に行っている人たちと話していて、「やっぱり一次産業のある町って、豊かだな」とすごく思うようになったのですね。逆に、異文化と言うか、違う所の人たちが行くと、そこのよさがすごくよく分かって、多分、面白さとか、大切なことも人から言われて。「こんな田舎だから」「いやいや、それがいいんじゃないですか」というのが、なかなか自分たちの中でいると、いい所なのだけれど、いい所って言えないことを、余所者が入ることによって引き出すというのが、神林さんのなさったことの、とても大事なことのひとつなのだろうと思いました。それから、やはりヒエラルキーが決まっているということ。ここは自治会長の家、ここは代々民生委員児童委員の家と決まっている所で、何をやるときにも、その人たちの発意でしか物事が動かないのを、ちょっと余所から入って、民主的なルールできっちりと進めていくという、ルールをしっかりやっていくことで、できること。外部の力というのも、ものすごくよかったなと思うのですけど。
東日本大震災のときに受援力ということが、すごく言われました。いろいろな人たちが手を出したくても、受ける力がないという所から孤立していくということがよくあったかと思うのですけれど。自立と言いながら孤立していくということ。「人の力を借りるという自立を」というのが、この町で神林さんが皆さんと一緒にやって来られたことなんだと改めて思いました。で、できれば私のお願いなのですが、先ほどの藁で作ったしめ縄を豊中に送ってください。うちの「び一のマルシェ」で売ります。（拍手）実は、そういう関わりをしているのですね。「いいなぁ、柿がなっているな」と都会からボランティアに行って言っていたのです。（地元の人は）「こんなもの、景色。カラスも食べない」と言う。都会にいると、全部、物って買うしかない。それを一生懸命もいで着払いで送ってくれたら、売れた金額を送ります、という形での関わりを岩手県の地域とやっているのですね。そうすると介護予防になるし、役割はできるしという所で、中だけで回すと、なかなか見えないことが、外と繋ぐことで、交流することで、また違う役割が見えたりするのかなと思います。外と中と、中を外部の力で変えることもあるし、また違う地域と繋ぐというのを、是非全国で繋げていただけるといいなと思いました。ありがとうございました。

青木）勝部さん、ありがとうございました。次は富田林金剛銀座街商店街会長、エメールヘア代表木全さん。ナビゲーターは運営委員の山田に交代します。山田さん、よろしくお願いします。

○市民団体、地縁団体や商店会、地域みんながふらっとに考えるまちづくり

富田林市金剛銀座街商店会会長　美容室エメールヘア代表
木全剛司さん
（きまた　つよし）

美容室エメールヘア　代表　無量山　徳明寺　副住職　金剛銀座街商店会　会長
金剛にぎわい創出実行委員　富田林市金剛地区再生指針推進協議会　委員
富田林市で美容室エメールヘアを経営しつつ家業のお寺の法務も行い二足のわらじをはいております。19 歳から富田林市で美容師として 25 年働かせていただいておりまして、金剛銀座街商店会の役員は 10 年、金剛地区活性化事業でもある金剛にぎわい創出実行委員は 5 年させて頂いております。最近では IT やコンテンツマーケティングの講師も行っております。

山田）にっぽん子育て応援団の山田麗子です。富田林市の交流会でどんなことをしてきたのかをご紹介します。報告書にも 20 ページ、24 ページなどに書かれていますが、10 月 23 日に富田林市で交流会を開きました。富田林では住宅公団が造成した団地が 50 年を経過し、人口構成がかわったという中で、住民の方たちが地域づくりをなさった。その中には子育て支援のひろばの団体も入り、商店会も入り、公団の自治会も入り多世代で地域づくりを行った。そのステークホルダーの方々に集まっていただき、これからどんな地域づくりをしようかということで交流を持ちました。その中で商店会の代表ということで木全剛司さんに出ていただきました。木全さんは、プロフィールにあるように、商店街で美容院を経営されていらっしゃる美容師でありながら、なおかつお坊さんです。金剛銀座街商店会の会長さんですがまだお若く、若い力で商店会を盛り上げていらっしゃる。2 代目、3 代目が担う商店会で、後継ぎがいないという高齢者の方の危機感、地域でも若い人がいないという中で、子どもたちがこの地域をふるさとと思い、住んでいてよかったと思える商店街にしたいと、子どものことも考えた商店街の活性化を始められた。金剛バルといった地域の文化祭的なイベントを催して地域の多世代が交流を促すなど、地域で高齢者も子どもも居心地のよい社会を作ろうとされています。その木全さんにこれまでの実践をお話しいただきます。

木全）こんにちは、大阪は富田林市から来ました木全です。みなさん富田林市はご存知でしょうか？　昨年、警察署から脱走した人が山口県まで自転車で逃げたりして有名になったまちです。大阪の南の方に位置し、人口 11 万人の小さな市です。ご紹介をいただいたように、わたくし金剛銀座街商店会の会長をしております、その中で美容室「エメールヘア」を経営している美容師です。実家がお寺でお坊さんもしています。
なぜ、美容師がお坊さんをしているかというと、先に美容師になりました。稼業のお坊さんが嫌で、普通に大学に進学して企業に勤めたとしても、土日が休みであれば法事の手伝いに駆り出されます。土日にも勤務があるサービス業に就かない限り、この稼業からは足は洗えないと思い、親が敷くレールの真逆を歩んで今に至ります。美容はもちろん好きですが、そんなことで二足の草鞋を履いています。

私のやっている美容室のある商店会ですが、歴史としては昭和 43 年にできた商店会です。僕が生まれる前です。若いと紹介してもらえましたが、そこそこおっさんです。そう言っても、商店会を引っ張ってこられた諸先輩方がいるので、僕が三世代目くらいの経営者層になります。その中で会長をしているのでうるさい人もおり、大変ではあります。
富田林市でも少子高齢化が進み、人口もどんどん減っていっています。65 歳以上が 2.7 人～2.8 人に 1 人という感じです。ベビーカーや自転車に乗っている子どもより、押し車を押しているお年寄りのほうが断然多い地域です。我々商店会の仲間では商業者として何かしなくてはいけないという思いを持っていました。ただ、それぞれ得意分野を持っていいても何をしてよいのかわからない。どうやったらこのまちが盛り上がるかという話をいつもしていました。大阪的なノリで、面白いことやろうやと仲間が集まり、湖もないのに鳥人間コンテストをやってみようよ、商店街の前は坂になっているので降雪機で雪を降らせて自作のそりレースをやってみようなどと話し合ってきました。
そんな中で富田林市は（古い町並みの残る）寺内町をとても大切にし、商工観光課では重点的にお金を使っています。我々としては、納税もしているし、富田林が良くなってもらわないと困ると思っていますから、我々にも少しだけお金を出してもらいたい、力を貸してもらえないかと商工観光課にお願いに行ったりしていました。5 年前に金剛バルというものを始めることとなりました。地域密着型のイベントです。昨年の 11 月には、3800 人の来場者がありました。過去最高です。天候にも恵まれて有難いことです。少しずつ地域に根付いたイベントになっているかなと思います。お手伝いしてくださる地域住民の方も増えてきました。裏方で手伝ってくださっているのは、商業者だけではなくほぼ住民の方です。
行政の方々は我々と少し感覚が違い、前例のないことはやりたがらないということがあると思います。お願いすることは多々あっても、私たちの思いとギャップがあり、前に進めるのが難しいということがあります。その中で富田林市は協力的で、助成金も出してくれるようになりました。僕たちが自由にできるようにさせてもらっています。金剛地域は活性化されているのではないかと思います。
自分たちの町は自分たちでやる、まずは自分たちが楽しむという精神でやっています。3800 人が来場するイベントですが、コアメンバーは 10 人程度です。あとは市民の方々の協力で成り立っています。僕らの合い言葉はＴＴＰです。徹底的にぱくる。ほかの都市でやっておられることをいろいろ調べて、できることはまねる。成功していることはまねる。それが近道だと思ってやっています。電飾も自分たちでつけていますが、たまたま富田林市にイルミネーションを作る会社の社長さんが住んでいらっしゃったので、お願いしたら、快く寄付していただきました。そんな感じで成り立っています。イルミネーションは豪華で、ペットボトル

でクリスマスツリーを作ったりしています。駅から3ブロックのメイン通りをイルミネーションで飾っていますので来ていただけたら有難い。

大阪では昨年、台風が直撃しました。富田林でも被害を受け、私たちのある商店街でも大変な被害を受けました。関西国際空港の連絡橋もまだ工事中で、まだ爪痕が残っている状態です。我々商店街で、うちの美容室も臨時休業としました。スタッフには休むように伝えましたが、予約をいただいているお客様がいるので、僕がお店に出勤して一人ひとりにお電話して、台風が接近しているので日にちを変えていただけないかとお願いの連絡をしました。「わかりました」と応えてくれる人がほとんどなのですが、数名は「大丈夫、行きます」と回答する人もおられます。「いやいや、危ないから」、「せっかく髪をセットしても、台風でぐちゃぐちゃになりますよ」と伝えても、「大丈夫やから」と切りはる。こちらは待ってなくてはいけません。スタッフ休みなので僕一人でパーマやカットしていました。その際、「なぜ、今日なのか」と尋ねると、「家に一人でいるよりも、ここに来たほうが安心」と答えられます。なぜかと考えると、いらっしゃった方みなさん、単身で一人暮らしでした。ご主人に先立たれたとか。「安心だ」といわれても、商店街の建物自体も50年を経過しているので危ないのではないかとも思いつつ、なるほどとも考えました。我々商店会、商業者が担う役割とは何か、「そこに行くとあの人がいる、あそこに行くと必ずあの人に会える」という安心感ではないかと思い至りました。避難所もいいけれど、見慣れた人のいるところに行きたいのかなと思いました。僕は、パーマが終わったら、台風の中、一人ひとりを送っていきました。「ありがとうございました」といわれましたが、帰りはひどい風でした。いろいろなものが飛んできて、車も傷だらけになりました。後日、その中のおひとりが、「兄ちゃん、車、傷できたやろう、悪かったな」とおっしゃって、補修材を持ってきてくださりました。よく見たら、自分の車の色とは違うのですが、車のことも詳しくないおばあちゃんが、ホームセンターに行って買ってきてくれたというそのプロセスがうれしいと思いました。美容室でありながらも、そういったところで何か役に立てることがあるのではないかと、その後、商店会として会議をして、古い商店街で何も設備はなかったのですが、少しだけの水と非常食、ＡＥＤを設置することとしました。商店街としても防災にも何か役に立てるのではないかと思いました。

この地域にまちづくり会議が立ち上がっています。4つの部会があり、イベント部、防災、公園活用、居場所づくりの4つです。自治会長など、金剛地区の市民の方に参加していただいて活動しています。その中で、過日のようなこともありましたので、防災部で避難訓練をしました。結構な参加者があり、せっかくやるのだから、最新の消防車、自衛隊なども呼んでみてはどうかと提案はしていますが、商店街が担っていく、我々だけが頑張ってもかなわない部分もあります。
商店街のある地域には金剛団地があり、賃貸が5000戸、分譲で1500戸ほどあります。そういった地域で、ほとんどがご高齢で世代交代や、空き家対策なども必要ですが、僕らとしては子どもさんに特化したことをやりたいと考えています。金剛バルにちなんで、商店街のひろばで親子ふれあい祭りも毎年、開催しています。地域の子育て支援のＮＰＯさんと協力して一緒にしています。牧場からいろんな動物を連れてきてもらって移動動物園を行いました。ポニーに400人くらいの子どもを乗せてあげましたが、ポニーも疲れたのではないかと思います。親子合わせて1200人程度来

てくれました。商店街では、これからの子どもさんも大事なので、近隣の幼稚園や保育園の園児にお願いしてペットボトルツリーを作ってもらっています。この2～3年くらいのことです。以前は役員が作っていましたが、やればやれるほど僕らがしんどくなってくるので誰かに頼めないかというのが、最初の発想でした。そこで子どもたちに参加してほしいという考えもあり、近隣の園にお願いに行きました。ＮＰＯ法人（ふらっとスペース金剛）さんは幼稚園・保育園とのつながりも強いので、そちらにお願いしたところ快く引き受けていただきました。金剛地区の幼稚園・保育園全部が参加してくれました。こんなイベントに参加することによって、それまで関心のなかった親御さんやおじいさんおばあさんも一緒になって地域を盛り上げようという気持ちになってくれています。そこから来場者も増えだしました。面白いもので、園長さんも必ず見学に来られます。そうすると、隣の園の出来栄えがよいんじゃないかとばかりに製作に燃えてくれます。そのため年々クオリティが上がっています。有難い話です。

最後になりますが、参加してくれる人はみな楽しそうでしょう。楽しそうに作ってくれます。園によって園児の数の違いもあるので大きさに差がありますが、クオリティは上がっています。イルミネーションの点灯期間は11月25日から1月28日まで設置していました。そうすると園児のご両親や祖父母など、自分が作ったものを探してイルミネーションに来ます。それまで人通りが少なかった商店街も、毎日、子どもさんと両親や祖父母などと来るようになり、活気が出てきています。これに気をよくして、今年、もう少し増やそうと野望を抱いています。このように、地域と密着した活動をしています。我々は商業者なので地域に愛されなければ前に進みませんので、色々なことを一生懸命やっています。私たちの父母、祖父母、その先、だれか一人でも欠けると我々は存在していません。当たり前のことですが、命の連鎖、縁があります。自分たちのまちもその縁によって成り立っているのですから、商店会、商業者もその縁をつないでいって、未来を担う子どもたちが圧倒的に喜び楽しめること、それを見守る大人が楽しめる街づくり、地域づくりが私たち商店会、商業者の役割ではないかと考えています。

勝部）すごい実践ですね、おひとりでゆりかごから墓場まで、一人子育て支援という感じなのですが、自分の街でもお店を始めました。社会福祉協議会で店舗を持っている例はない。引きこもりの子どもたちが働く「びーの×マルシェ」というのですが、やりだして思ったことは、福祉の相談窓口より商店街のほうがずっと敷居が低いということです。近所の人たちは気楽に相談に来られます。引きこもりの子どもたちが働いていることは薄々わかっているけれど、買い物に来ている人も、どうも息子さんが引きこもりではないかという人だったりします。普通の会話の中で自信

をつけさせてあげることは、商店のほうが多いような気がします。専門の相談員さんに「何に困っていますか？」と尋ねられるよりずっといいと思います。そう考えると、商店の力や商店街の力をもう一度再生するために、何のために集まってきたのか、店がある意味とは何なのかと考えて徹底的に挑戦する姿に感動しました。さきほどの神林さんと共通していると思ったのは、我々、支援ばかりしようとしていましたが、参加が大事ではないのか。店に来てもらうためによい商品を作ることも大事だが、そちらばかりではなく、店に来て自分に役割があったり、楽しみがあることのほうがお店に足を運ぶというのも共通しています。遊び場を自分で作ってもらわなくてはいけないというのと同じように、商店街に子どもたちの居場所も作っていく、そういう発想の展開になると足も運ぶし、買い物についでに行ってくる人も増えてくることを実践されていると知って、学びになりました。
美容師さんということなので、ぜひお願いしたいことがあります。今、引きこもりの若者たちはアマゾンで何でも買えるので全然困ってません。インターネットで情報を得ることもできますし。しかしできないことが二つあります。歯が痛いとき、髪の毛が伸びたときは自分で切ることができません。私はアウトリーチするときに、本人の困り感から入るという方針なので、結構美容師さんと一緒に訪問することがあります。美容師さんと一緒に訪問し、髪を切ってもらっている間、身動きができないのでそこで話をします。今の世の中は、1億総活躍で、1歳になったら保育所に入り、ずっと働き続けて、70歳まで働くことが求められています。グローバル人材ばかり求められ、そうでなければ会社からいらないと排除される。世の中で片方では過労死するくらいで、片方では役割がないという人がたくさん出てきます。役割がないといわれる人に、地域の中でちょっとした役割を与える可能性は商店街にたくさんあることを気づかされました。ありがとうございます。

山田）勝部さんありがとうございました。次は上越市です。當間さん、ご紹介をお願いします。

○多機関多職種連携によるすこやかなくらしの地域包括ケアについて

上越市健康福祉部高齢者支援課副課長
細谷早苗さん
（ほそや　さなえ）

平成8年　上越市役所に保健師として入庁　ヘルス部門である「健康づくり推進課」に配属される
平成16年　こども課へ異動　要保護児童対策地域協議会の立ち上げや虐待対応、乳幼児の療育・就学支援　思春期対策を担当する
平成22年　区総合事務所へ異動　こどもから高齢者まで幅広い保健師業務を実践
平成25年　高齢者支援課へ異動し、現職　介護保険事業計画の立案、評価　介護予防事業（生活習慣病予防、介護の重度化の予防、フレイル対策など）　地域包括ケアシステムの構築、新総合事業の制度設計・運用　高齢者の自殺対策、介護保険事業所の指導等を行っている

當間）豪雪地帯で知られる上越市ですが、今年はあまり雪がないそうです。上越市は、着々と子どもと子育てを支える仕組みづくりを進めて来た街で、エンゼルプランから始まった財政の伴わない国の施策を尻目に、一般財源化された保育所経費なども一生懸命に子ども・子育て分野に寄せていき、子ども・子育て分野をより豊かに育てて来ました。子ども・子育て支援新制度がスタートしましたが、お伺いした担当のみなさんは、異口同音に、法制化されたプログラムに新味はない。ただしちゃんとしたお金が国から降りて来て大変有り難い。施策を充実できる」と、おっしゃっていて、これは凄いなと思いました。昭和の時代に、3歳から15歳の子どもの居場所「子どもの家」を35町会に整備しました。町内会館兼用で使ってくださいと言ったら、みなさん「いいよ」と引き受けてくれたそうで、今でも続いているそうです。2001年、21世紀に入るや、若い世代を増やそうと、当時の総合計画の柱のひとつとして次世代育成支援課をつくりました。翌2002年には、24時間365日いつでも緊急利用できる一時預かり「ファミリーヘルプ保育園」ができました。2008年には「上越市子どもの権利条例」を策定、「上越市子どもの権利基本計画」のもと、子どもの権利の視点を取り入れた施策の展開に取り組んでおられます。さらに「すこやかなくらし包括支援センター」ということで、妊娠期から介護まで、年齢も性別も障がいの有無も関係なく、すべての市民の暮らしを、多分野多職種多機関連携師と市民、企業とNPOなどとの協働で支え合っていくものにしたいと考えておられます。上越市で保健師として健康づくり、児童虐待対応などに関わり、現在では健康福祉部高齢者支援課副課長として「すこやか

なくらし包括支援センター」にも関わっていらっしゃる細谷早苗さんに、上越市のお取り組みについてお話を伺います。細谷さん、よろしくお願いします。

細谷）みなさんこんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました上越市高齢者支援課副課長の細谷です。私もともと保健師をやっておりまして、今ご紹介いただいた子育ての分野については、ちょうど私が子ども二人目を出産したあと、こども福祉課（現こども課）に配属となって、児童虐待防止とか「子育てするなら上越市」といった取り組みをして、今現在は、高齢者を地域で支える高齢者のための地域包括ケアシステムのところで携わっています。これまでの経験と今やっていること、今後の上越市がどういうことをやって行くのかというあたり、お話をさせていただければと思います。

それではみなさんスライドを見ていただきますと、左下に「けんけんず」というので、犬と人間二人います。これは上越市の観光の可愛いゆるキャラになっています。真ん中は架空のわんちゃんですが、上杉謙信（左）と直江兼続（右）が右と左にいるということで、市長から、どこかに行って話をして来るときには必ずこれを宣伝して来いと（会場笑い）言われていますので、すべてのスライドに入れさせていただいています。

上越市はどこにあるかというと、今日新幹線で 2 時間かからないで来ましたけれど、北陸新幹線が通りましたので、（東京まで）だいぶ近くなりました。新潟市が新潟県の県庁所在地ですが、新潟市まで、実は高速道路を使って 1 時間半から 2 時間くらいかかるので、東京に来るのとあまり変わりません。仕事で富山県庁に呼ばれると、新幹線で 30 分、長野県庁だと 20 分で着くという、地元が一番遠いというところで、上越市は長野県と富山県にとっても近いところにあります。私が勤めている上越市役所から見えるのが春日山で、上杉謙信の居城があったところです。春になると高田公園、日本の三大夜桜のひとつに選ばれ、とても夜桜がきれいな場所がございますので、みなさん、ぜひ見に来ていただければと思います。

上越市は、元々の上越市とその周りの 13 の町村とが平成 17 年 1 月 1 日に合併し、今の新しい体制の上越市としてスタートしました。それぞれ小さな町村ではないんですが、実は山ばっかりというところです。（地図の）右下の大島村に行きますと、高齢化率が 50%を超えておりまして、年間のお子さんの出生が 3 人とかといったような超少子高齢化の地区もあれば、元の上越市の右隣の頸城村では高齢化率がまだ 26%ということで、同じ上越市と言っても、住んでいらっしゃる方の世帯構成は（地区ごとに）違います。また、北は日本海に面し、南の中郷村、安塚町、大島村などはとても山が深くて、今年は小雪ですが、とっても雪深いところで、多いときには 5 メートルくらい積もって、2 階建ての家の 2 階の窓から出入りしないと 1 階の玄関からはとても出られないという豪雪地帯です。

上越市広くなりまして、みなさん住んでいる様式が、同じ市内ですけれども全く違うという状況になっています。

平成 30 年の 3 月末現在、人口が 19 万 3000 人。合併した当時は 22 万人おりましたけれど、人口がどんどん減少しています。総人口は減っていますけれど、高齢化率は右肩上がりで、全市平均 31.52%。50%を超えているところもあります。

今日みたいにお休みの日は、みなさん若い方はお家にいらっしゃるんですけれども、平日は、お仕事で旧上越市と呼ばれる街のほうに行かれると、もっと高齢化率が高くなって、ほぼほぼ小学校の先生か、特別養護老人ホームの職員さん以外は高齢者なんじゃないかと言われるくらい、高齢者しかいないという地域も、なかにはございます。

以上が上越市の概要です。

次に上越市の取り組みについて。私は平成 8 年に入庁してからいろいろな部署を渡り歩いて来ました。自己紹介も兼ねてご説明したいと思います。

まずは健康づくり推進課というところで、地域の健康増進の取り組みを主に担当させていただきました。みなさん健診は受けていらっしゃいますか？　市民の方に健診を受けていただいて、検診の結果説明会を地域のお医者さんと一緒にやっていました。そのときに地域の住民の方、町内会長さん、老人会長さんと協働で、この地域の課題は何かねと言うお話をさせていただいて、その課題に対して、こういう講座をやろうかとか、こういう人に声をかけて講座の講師になってもらおうとかいうような保健師の学校で習う地区活動というのを 7 年間体験させていただきました。この 7 年間の中で、保健師として地域のキーパーソンを見つける、保健師一人では何も出来ませんので、地域で協力してくれる人を見つける、いろいろな方々とつながることの大事さを学んだと感じています。

この健康づくり推進課時代に一人目を生んで、1 年間お休みをいただいたあとにもう一人生んで、休み明けに、こども福祉課に配属になりました。「子育てするなら上越市」ということで、未満児さんの保育も積極的にやって来てましたので、下の子を生後 6 カ月で保育所に預けて、仕事に復帰しました

「今日お座りしたよ」「今日はいはいしたよ」と、自分が感じるより先に保育士さんから子どもの発育を確認して教えてもらっていて、「私保健師なんだけれどな」ということも感じましたが、このこども福祉課で初めて仕事をしたのが、子どもの虐待への対応でした。市で、気になるお子さんたち、虐待防止の協議会の立ち上げをしなくてはいけないということで、ちょうど子どもを産んで二人育てているので、担当としてはいいだろうと、この仕事を任せられました。

それと並行して担当していたのが、発達支援でした。子どもの虐待とかぶる部分もありますけれど、やっぱり育てにくさをお母さん方、お父さん方、おじいちゃん、おばあちゃん、感じていて、「なんでこんなに育てにくいんだろう」「どうしたんだろう」という思いと、「ほかの子と違う」と思われたくない、認めたくないという思いの狭間で、お子さんに叱咤激励し過ぎたり、期待し過ぎたりということで、結果的に虐待につながってしまったかなという方も、数多くいらっしゃいました。

さらにこども福祉課で担当させていただいたのが、思春期、中高生への思春期指導です。子どもの虐待を担当させていただいたときに、とっても若いお父さん、お母さんと出会ったことがありました。まだ自分たちも子どもなんだけどというお年で子育てをし

なければいけない。「こんなはずじゃなかった。ほかの子たちは高校に行って遊んでいるのに、なぜ自分だけこんなに辛い思いをしなければいけないんだろう」というようなことをおっしゃる若いお母さんもいらっしゃいました。「でも、もう自分の子どもだから」ということで、家庭訪問をさせていただきましたけれど、一方で、こういう思いをするお子さんたちを増やさないようにしなければいけない。じゃあ、なんでこうなっちゃったのかな？というと、やはり知識が足りない。それで、助産師会メンバーと一緒に、高校や中学校に授業に行かせていただきました。性教育ですね。学校の保健の授業ではやるんですけれど、保健の授業では、どこまでわかったか。生々しい話は学校の先生はしないけれども、私たちは生々しい話をさせていただくということで、じゃあ、自分たちは今すぐ親になれるのかどうかとか、責任は取れるのか、といったような話もさせていただきながら、ひとごとではなくて自分のこととして考えてもらえるように授業を始めました。今でも高校生と、中学生は 2 年生中心に、回らせていただいています。

その後区の総合事務所に 3 年いかせていただいて、ここが私は一番楽しかったんですけれど、地域に行って、いろんなお子さんから高齢者まで幅広く、保健師の業務をやらせていただきました。

平成 25 年からは、今の高齢者支援課に来て、介護保険制度とか地域包括支援センターの業務に携わって 6 年目になります。今現在は高齢者を中心に地域包括ケアシステムの構築を担当しています。

こども福祉課の所属時代に、いろいろなことを経験、自分もちょうど子育てをやっている時期でしたので、とても担当していた業務がためになったなあと思っています。因にその時の子どもが、今、高校 3 年生と中学 3 年生になって、（受験）真っただ中になっていますけれど。ちょうどその時授業でやっていた話を、今の自分の子どもにも出来るのがとってもいいなあと思っています。

今現在上越市では、虐待のこととか、あと高齢者の虐待、複合世帯で、先ほど 8050 とか出ておりましたけれど、そういう狭間の方を担当する課が、どうしても行政だと縦割りになってしまい、担当課がいないので、「すこやかなくらし包括支援センター」という部署をつくりまして、そこで複合的な課題を持つ世帯の支援、人ではなくて世帯全体を支援する保健師、社会福祉士、保育士などを配置、チームで対応させていただいています。

今担当している高齢者の地域包括ケアシステムの話をさせていただきます。上越市が地域包括ケアシステムの構築に取り組み始めたのは平成 25 年度からになります。具体的には地域包括支援センターの機能強化ということで、保健師、社会福祉士、主任ケアマネジャーの 3 職種を揃えなければいけないということになっています。1 型から 4 型ということで、国では 4 種類の地域包括支援センターを運営していいですよという決まりになっています。人口の小さいところでは、先ほどの 3 職種のうちひとり配置でもよい形になっていますが、やっぱり高齢者への虐待とか、身元引き受け人や支援者がいない、キーパーソンがいない方がとても多くなって来ていますので、それへの対応をするにはひとりでは難しいだろうということで、今年度地域包括支援センターを再編成させていただいて、すべての地域包括支援センターに 3 職種を揃えた機能強化の取り組みをさせていただいています。それをすることによって、対応力が向上すると思っています。

新総合事業は平成 27 年度から始めました。

「高齢者を地域住民が支え合う体制」をつくりたいと、行政主導ではありますけれど、地域住民の方や NPO の方とも話し合いをさせていただいて、仕組みをつくっているところです。具体的には介護保険をやっている株式会社や法人にお願いすることはしませんでした。地域住民の方々が自分たちで運営している組織にお願いをすることで、住民自身が自分の地域の高齢者を支えるためにはどういう仕組みだったらいいのかなというのを自分たちで考えてもらうように、仕掛けをさせていただいております。

平成 25 年から進めて来た高齢者に向けた地域包括ケアシステムの構築が一定程度整って来ましたので、今年度策定している地域福祉計画の中では、子どもさんの福祉についてもかなり出来て来ているんですけれども、引きこもりや障がい者など支援が必要な方全般の上越市全体の地域包括ケアシステムを作っていこうということで、来年度から具体的な取り組みをする予定にしています。

先ほどお話しした「高齢者を地域住民が支え合う体制」の仕組みについて説明します。上越市には 28 カ所地域自治区がありますが、1 地区に 1 カ所ずつ介護予防を目的とした高齢者の通いの場を常設でつくりました。一応 65 歳以上の高齢者対象としていますが、若い方も来ていいよということにさせていただいています。週 3 回程度教室を開いていて、送迎の車も購入補助費 350 万円を出させてもらって、車の購入にも使っていいし、先ほどのお話にもあったような商店街の活動のような活動を住民組織でも行っていますので、購入した車を、そうした活動に使ってもいいよと言っています。そこには生活支援コーディネーターさん一人を配置して、教室の運営などをさせていただいています。中には認知症カフェをやったり、認知症サポーター養成講座をやったり、介護予防の教室をやったりということで、ここが地域で人が集まる拠点ということにさせていただいています。大枠は市のほうで枠組みをつくらせていただきましたけれど、詳細には口出しをしない、地域の実情に合ったやり方でやっていいよということで、地域の自主性にお任せして運営していただいています。

上越市の地域包括ケアシステムのイメージは、私たち行政だけでは、この地域包括ケアシステムを進めていくのは難しいということで、（スライドの）図は、第 7 期高齢者・介護保険計画に入れたものですが、平成 27 年につくったもので、地域のお医者さんとか、介護保険の事業所、一般市民、先ほどの地域住民の方々に協力していただきたいことを、この図にまとめています。いろいろな会合などではこちらの図を使って説明し、同じ方向に向かって取り組んでいこうねということで、この図を目標にさせていただいています。詳細はご覧いただければと思いますが、行政のほうでこういうことをやりたいなと思っても、協力者がいなければ絵に描いた餅になってしまいますので、いかに市の考えを協力者の方に理解していただくかというのが大事かなと思います。こちらの事業を始めるにあたっては、当時、私も課におりましたけれど、係長や職員とともに地域住民の方のところへ、全部で 60 カ所くらいのところに説明に行って、市の考えをお願いする中で、仲良くなって、今ではいろいろなイベントに呼んでいただけるようになりました。やっぱりそうやって膝詰めで、腹の中を割って話すことで、今のシステムが出来たと感じています。

今後上越市では、高齢者だけではない地域包括ケアシステムを広げて行きたいと思っておりますので、そういった意味でも、協力者の方々には、この考えをご理解していただいて、この取り組みを継続していきたいなと思っています。私からは以上になります。

當間）細谷さん、ありがとうございます。勝部さん、コメントをお願いします。

勝部）「子育てするなら上越市」とか「高齢になっても住み続け

られる」とか、こういうキャッチフレーズを言っている自治体のことは聞くんですけれど、本当にやれるかって言うと難しいなと思うことがあります。こういう事業やってると、社協とかいろいろなところに丸投げというところが多いんだけれど、上越市は公務員の人が地域に入っていくところが……。保健師さん？　元々地域づくりをやって来られたというところでは我々の先達というところを、ちゃんと引き継いでこられたということはとても大きいなと思います。地域力強化検討会のときに、メンバーの中に保健師さんが入らなかったんです。それで保健師協会の方達が「地域づくりって、我々がやって来た専売特許じゃないか」、「どうしてこれを保健師抜きでみんなが議論しているんだ」と非常に危機感を感じられた。地域保健の雑誌の中で、私が呼ばれて、周りがみんな保健師さんで、「どうして我々が入らないんだ」という雰囲気で、凄まれて、「そんなの私がいわれても知らないですけど」って応えた記憶がありますけれど。でも、私も、社協に入ったときに、「アウトリーチ」とか「家庭訪問」とか「地域づくり」って教えてもらったのは保健師さんだったんですね。何でもかんでも民に任せたほうがいいって丸投げじゃなくて、行政もそこに足を運ぶとか、膝を突き合わせてとかいう姿勢が大事だなと思いましたし、そこの熱が周りを動かしていくというか、大きな方向性を出していかれるというところが羨ましいし、みんな、どこも上越みたいだったらいいなって思いながら聞いていたんじゃないかなと思いました。ありがとうございました。

當間）勝部さん、どうもありがとうございました。
これで 2018 年度の報告と提言は終わります。

質疑応答

當間）このあと重要な質問をご登壇のみなさまにさせていただく予定だったんですが、時間が押してしまっているので、質疑応答に入らせていただきます。地域まるごとケア・プロジェクトの年度報告会で、これまで質疑応答をやったことがなかったんです。基調講演の勝部さんのお話から今までの中で、何かこれをもう少し聞いてみたいとか、何かございましたら、どなたか。ご所属とお名前からおっしゃってくださるとありがたいです。

参加者）普段は会社に勤めていて、プライベートで、ボランティア活動とかこういうイベントに参加している者です。私自身がボランティアをしているのがほとんど障害者サポートで、車椅子ユーザーとか障害者のサポートをしているんですが、最近気になっているのは高齢者と子どもを結びつけられる仕組みってないかなあと思っています。街の掃除をするグリーンバードというゴミ拾いの団体がありますが、そこで子どもたちと、おじいちゃん、おばあちゃんたちと一緒になって 1 時間ぐらい掃除をするという活動は始めているんですが、それ以外に見出せることがなくて、なかなか厳しいなというところがあって、何か違ったことをされているところはないかなというのがひとつと、もうひとつは高齢者の男性が、引きこもりじゃないですけれど、なかなか外出しないと。私自身も今年 63 になりますが、どうやったら男性が外に行くようになるのか、補足でいいですがお伺いしたいなと思いました。

當間）どなたでもいいですか？　では、ぱっと今思いついた方。

神林）2 点ほど、ぱっと浮かんだことがあります。1 点は高齢者の方々と子どもだと、東北では結構そういう事例が多いんですね。というのは孫育（まごいく）という言葉がありまして、お父さん、お母さん共働きがほとんどなんですね。子どものことは高齢者の方がするというところで、居場所づくりなど、僕たちもさまざまな事業をやって来ました。やって行く中で大事だったポイントは、子どものためにというよりは、高齢者と子どものほどよい距離感で一緒にいる空間づくりって凄い大事だったなと思います。ときとして高齢者も大人も、子どものことを使うことがよくあるんです。子どもはやっぱり声を出すことが難しいので、子どもも本当に楽しい、高齢者の方も本当に豊かに過ごせる時間というと、あまりに子どものために子どものためにというと、ついつい子どものほうが「ああ、おじいちゃんのいうこと聞いてあげるよ」「竹とんぼのつくり方教えてもらってあげるよ」ってなってしまうので、高齢者の方も「オレ自身がやりたいことやってるんだよ」というので、子どもが「あのおじいちゃん、おばあちゃん、何やってるんだろう？」ってつながったときに、それが持続的になっていったかなと思います。これが 1 点で、もう 1 点は、気仙沼とかで今でも続いているのが、やっぱりおやじの会とか、健康麻雀はやっぱり大きい。勝部さんのほうでも麻雀教室ってありましたけど、大きいパイで麻雀というのが広がっていますね。

細谷）上越市のほうでもサロンと言うと、ほぼ女性で、男性はなかなかおいでにならないということで、いろいろ工夫をしています。囲碁、将棋、麻雀だったらやってみたいというので、それをやってみたり、あと男性だけのサロンの会というのを作って、そこは月 1 回なんですけれど、自分たちでやりたいことを会員で話し合って、そこはお酒も付いていますけれど、自分たちの会を自分たちで検討するということをやり始めたら、ほかの地区でも自分たち

の地区でもああいうのをやりたい、欲しいということがありました。事務局は女性が絡んでいるんですけれども、参加者は全員男性というサロンがあります。

勝部）高齢者と子どもの活動。違う人が群れると役割が出る。同じ高齢者だけが集まっていると、みんな同質な感じになっちゃうので役割って見えないんですけれど、ちっちゃい子がいると、何かを教えたくなるとか。「豊中あぐり」は、次は JC さん、青年会議所さんを真ん中にして、「こどもあぐり」が始まります。子どもさんたちに野菜づくりを教えるというのを一緒にやってもらう。あとは学校の空いている場所で、先生たちが働き方改革でこれ以上仕事ができないので、畑とか園芸のノウハウもないということで、今、学校に「あぐり」のおじさんたちが派遣されています。そこで畑を作って子どもたちと交流ということも始まっています。そう考えるとどこにも学校はあるわけだし、高齢者も土触る場所がないし、子どもたちは経験することができないから、少しそういうのを組み合わせて行くと、みんなのコモン、共有知になっていくということはあるんじゃないかなというのは思います。みんなが楽しいということと、違う人たちが集まるということが、色々な経験、交流になって、楽しさが生まれるかなというのは思っております。

當間）ありがとうございました。いかがですか？

参加者）ありがとうございました。すごく勉強になりました。昨日は、社会人メンターと大学生が半々という組み合わせで、ワーク・ライフ・バランスとかを学ぶセミナーに行ったんですが、やはりお互いに刺激し合うということが凄く意義があって。やはりここに集まってるような意識の高い人たちが、将来の子どもたちのために、自分の背中を見せられる大人に、より成長しないとあかんなっていう感じはますます思いました。きょうのことを学んだというだけでなくて、周りにカタリストとして広げていくという活動を続けて行きたいと思いました。ありがとうございました。

勝部）TTP（とことんぱくる）してください。

當間）ありがとうございました。
これで後半の報告と提案の部を終わります。もう一度ご登壇のみなさまに拍手をお願いします。

閉会挨拶

にっぽん子育て応援団　企画委員
柳澤正義

今日は大変大勢の方にお集まりいただきまして、どうもありがとうございました。

「暮らしの中で育ちあう　命を守るコミュニティ」というテーマで開催した、地域まるごとケア・プロジェクトの 2018 年度報告会ですが、この地域まるごとケア・プロジェクトというのは公益財団法人さわやか福祉財団さんからの委託をいただいて、にっぽん子育て応援団が取り組んでいるもので、今年で 4 年目になりました。大変大きな成果を上げていると思います。委託事業として資金提供くださっているさわやか福祉財団さんには、まずお礼を申し上げなければならないと思います。

今日の報告会を、私は勉強する立場で拝聴しておりました。

まず基調講演での勝部麗子さんのお話は、地域まるごとケアの神髄ともいうべき内容を、本当に詳しくお話しくださったと思います。私自身、大変大きな学びになりましたし、ご参加のみなさまにとっても大きな示唆が得られたのではないかと思います。これからいろいろな活動をするうえで、大変参考になりました。

それに続いての三つの市からの報告。それぞれに大変特色のある地域での取り組みで、お話しくださった方々もそれぞれ特色をお持ちでした。これもまた大変有意義なお話であったと思いますし、また勉強になりました。

今日の報告会での学びを、それぞれの地域での活動に役立てていただければありがたいと思います。今日みなさまがお越しくださったことに、深く感謝申し上げます。

簡単ではございますが、閉会のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

地域まるごとケア・プロジェクト 2018 年度調査＆交流会開催報告会
「私たちの手で創り上げる　地域まるごとケア」
2019.2.17

参加者総数：80 名　アンケート回答数：49 名

1．このフォーラムをどこでお知りになりましたか？

1．応援団ホームページから 7 名
2．他団体ホームページから 4 名（東京ボランティア市民ウエブ 1 名）
3．応援団メールマガジンから 7 名
4．他団体メールマガジンから 1 名（ひろば全協 ）
5．友人・知人から 12 名
（Facebook2 名　當間さん 1 名 ）
6．その他 18 名（Facebook6 名　SNS2 名
チラシ 3 名　目黒区ボラセン 3 月号 1 名
区報 1 名　社協広報誌 1 名
今年度ヒアリングを受けた 1 名
メールで案内もらった 1 名
案内もらった 1 名　FAX1 名 ）
無回答 1 名

2．調査報告会の感想をお聞かせください。

・基調講演、報告ともにすばらしい事例をお聞きでき大変勉強になりました。“TTP” パクらせていただきます！ありがとうございました。
・豊中市の小学校区単位のボランティア、しくみづくりがとても参考になりました。
・豊中市の事例は地元の SW を勉強する上でも大変参考になりました。
・勝部さんの講演、大変参考になりました。
・勝部さんのお話をお聞きでき良かったです。ありがとうございました。
・勝部さんのお話は全く圧巻でした。御自身の WLB で燃え尽きそうなときがあったのかと胸が熱かったです。行政や福祉の専門家ばかりの会だと 1 層だの 2 層だのとむずかしい話でつまらなくなるところ、こむずかしい図とかがいっぱい出てくるところを「福祉」からはなれたジャンルの人が語っていくなかでとてもわかりやすかったし、心にひびきました。
・勝部さんの取組、大変勉強になりました。3 人のパネリストの方々の報告も地域それぞれのエピソードが学びになりました。
・勝部さん、神林さん、木全さんのお話は面白かったです。
・勝部先生の話を生で聞けて感動しました。TTP、私達もよい所をまねをして行うようにしていますが、地域が少しづつ変わってきている事を感じている日々です。
・大変良かった。
・さまざまな地域での取組の事例、どれも参考になりました。
・具体的な活動事例がたくさん聴けて、とても参考になりました。
・実例を当事者の方の本音を通して聞くことができ、とても心に響きました。市民の中に溶けこんでの泥くさい活動も実体験してきた方々のお話がとてもおもしろかったです。「支援」ではなく「参加」というキーワードが印象的でした。
・大変勉強になりました。有難うございました。
・８０５０、主語がかわると問題もかわってくる。勉強になりました。商店街の役割について、未来を担う子どもたちとそれを見守る大人が輝ける地域づくり。心からそう思いました。
・いろいろな地域で活動されている方のお話を聞くことができて良かった。たくさんヒントになる事があったので、今後の活動にいかしたい。
・貴重なお話が聞けて良かったです。
・アウトリーチを誰がやるのか、どうやるのか…。地域とつながってない人をどう地域に出していくのか…。
・排除から包摂。
・身近な居場所があることが大切ですね。
・地域の中に居場所をつくるとか、人のむすびつけ方の実践事例がたくさんきけた。
・様々な事例を共有することで、多くの人々に多くの学び･発見があったと思います。全国各地､場所は違っても､想い・目的は同じ。協力し合って、明るい日本を作る上で大切な取り組みだと感じました。来て良かったです。
・各地の参考になる事例の話をきけて良かった。
・一人にしない、ということが大切だなと思いました。
・発見と解決は両輪 !! というキーワードが一番心に残りました。勝部さんの冒頭の 2 つのグラフもインパクトありました。後半の 3 人の発表もとてもよかったです。
・いろんな職種の方たちが、経験し学んだお話をきくことができ、とっても意義のある時間でした。普段、介護施設で働いていると職場の中だけであまり地域に目を向けることができていなかったので、私たちの市ではどんなことをやっているのかな、自分たちはどんなことができるのかなと、考えまずは TTP をしたいと思いました。
・構造や枠どりの説明ではなく、地域の人々の表情が見え、声が聞こえてくる様な報告が心にのこりました。
・様々な地域での取り組みを知ることができて勉強になりました。
・事例を本人の口より具体的・詳細に知れて良かった。
・自分の活動の参考にしたいです。
・スティグマを抱える子どもたちはなかなか外へ赴くことが難しいという実情がある中で、CSW や民生委員が声をあげてアウトリーチしていくことの重要性を感じました。そこに至るまでには地域住民や民生委員、その他ステークホルダーが、我が事として当事者を助けたいという熱意、誰でも気軽に参加できるための仕組みづくりの重要性を再認識しました。
・それぞれの報告がとても興味深かっただけに、それを横ぐしで通すようなこと（勝部さんのコメント、それぞれではあったのですが）全体を通してもっと語っていただくのを聞きたかったなと）があると、3 名が意見を交わすようなことが、欲を言えば拝見したかったと思いました。
・豊中の事例は参考になりました。どのようなチームワークで行っているのかも聞きたかった（地域の人との関わり以外で社協内部体制）。富田林の商店のお話、おもしろかったです。支援ではなくて参加というワードが大切と認識しました。
・いくらすばらしい制度を作っても、声をあげない人たちには届かないことを改めて実感しました。非常にエネルギーがいると思いますが、ローラー作戦や豊中あぐりなど、成果の出ている活動がもっと広がっていくと良いと思いました。誰かのために頑張るのは大変だが、自分

がやってみたいがあると、うまく活動が進む、お客様にしないという考え方が印象に残りました。
・豊中でのモデルケース、成功例がもっと他地域に広がれば､とも思います。（社協体質の問題？各地域の問題？）富田林事例発表がやや退屈だった。美容師さんにいまいち共感できなかった。
・多世代地域で地域食堂を行っており、とても参考になりました。
・大変参考になりました。
・個々の取組みをうかがい、地域包括の大切さを更に感じました。自立した個人を造り出し、ある程度任せるということが必要だと思います。
・初めて参加し、色々な事例を聞くことができ勉強になりました。
・大変参考になりました。各地での取り組み、地域づくりのかたちを学ぶよい機会になりました。いろいろな可能性を感じました。
・各地域で活躍されている実践者の方のお話、とても興味深くうかがいました。「赤ちゃんからお年寄りまでだれ一人として孤立させないまちづくり」本当に大切だと思いました。遊び場づくりの話、商店街の話、みんなが参加できるよう、役割をもてるように進めていくことがうまく活動できるコツだと感じました。
・基調講演も各地からの報告も大変刺激を受けました。最近あきらめかけてた気持ちに再びスイッチが入った感じです。自分に何ができるのか改めて考える機会になりました。
・地域は違えど、参考になるお話が多かった。勝部さんのお話をもっと聞きたい位興味深かった。木全さんのお話もユーモアたっぷりで示唆のある報告で勉強になった。
・勉強になりました。TTP の精神で…。
・改めてガンバロウというやる気をもらった。
・発表の方々の内容が素晴らしいので、資料には各々の要旨、メッセージ、ポイントを書いて下さい。
・孤立させないことの大切さ、熱意を感じました。まだまだできることをしていこうと元気を頂きました。ありがとうございました。
・参考になる事例を聞く事ができ、今後の活動の参考になった。

３．地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください。

・新しい団体を作り、子どもからお年寄りまで自分の役割と自立できるような地域をつくりたいです。
・いろいろな活動がわかった。
・高齢者と子ども。ちがう役割の人が群れると役割でてくる…いいですネ！ TTP も覚えました。します！
・「敷居を低く」ということ、「強制しないこと」「自ら参加する自由」「不参加の自由」が基盤にある活動が大切だと思います。
・“TTP” 出来る事からやって行こうと思いました。
・民生さんや行政の方とのつながりがうすい（一緒に活動しにくい）と感じることもあるが、自分たちができることをやっていけることは何なのかをみんなで話し合いをしながらすすめていきたい。（時間はすごくかかると思うが、あせらず長いスパンをみすえてやっていこうと思います。
・人と人がつながる場所をまず作っていけたらと思っています。
・「皆が楽しい」を見失わないように、進めていってほしいと願います。
・多様な価値観を受け止める地域づくりが必要だと思います。
・いつも思うことは、福祉に関わる人がそれを前面におしださないことで福祉じゃないふりをするがごとくつながりを「福祉じゃない人」に向けてもっていくこと。それができる人が本当にすごいコーディネーター、CSW のお仕事なんじゃないかなぁと思っています。木全さんの話が象徴だとほんとに思いました。
・「発見は住民が向いているが、解決はそうとも限らない」ということが印象的でした。固定概念、自分の感覚に固執せず、TTP で取り組みを進めることが大切だと思いました。
・自分の地域でもとり入れていきたい。
・“ひとりぼっちにしない” 志が大切だ！と改めて思えました。
・予防的な取組として地域づくりをがんばっていきたいです。
・追いつめる見守りではなく、暖かい見守りの実現の難しさを経験しました。明るい結果につながる見守りにしたいと思っています。
・地域まるごとケアを実現するためには、多くの人の協力が必要なのだと改めて思いました。将来、地域福祉を推進していくことに関わることができたら良いと思いました。
・子ども、高齢者、どこに意識を向けるかは難しいが、とりあえずとびこんできた問題を考えていくことからはじめていこうと思う。
・自分が住んでいる地域にも一人くらしの高齢者の方が多く、そういう方々と子育て世代や子どもたちが関わり合える場や活動ができると良いと考えています。しかし、勝部さんの話に合ったように地域に知られたくないとか助けられたくないこともあるんだと気づき、一人一人の状況を理解し、誰もが幸せになる地域になれればよいと思います。
・行政や社協は他地域の事例を視察しても、自分たちの地域に活かさないことが多い。もっと積極的に取り組めば改善される自治体も多く出てくると思います。
・多世代地域で地域食堂を行っており、これを広げたいです。
・できる事から実践します。
・私自身、SDGs を推奨しております。そのためには地域を超えた全ての人が役割を任い、自立した人間を創出すべくお手伝いができればと感じました。
・片づけのプロとして地域に向けてできること、ゴミ屋敷問題にどのように関われるか考え行動していきたい。
・今、プロジェクトを立ちあげています。
・地域包括ケアシステムの推進と、ぜひ「わが事、丸ごと」をすすめられる様、行政に提言して行きたいと思います。
・地域へ出ることを続けています。参加する機会をつくることの大切さをもっと伝え、社協職としてスタッフへもしっかり意識して取組むことを伝えたいと思います。
・地域のひとりひとりがお互いに思いやりを持てるように、また他人ごとではなく気にかけながらできることを見つけ、地域のことに参加できるよう、コーディネート

していくことが大切だと強く感じました。「この地域で生活していて良かった」と思ってもらえるよう、今まで以上に自分にできるやり方で実践できることを少しずつ見つけていきたいと思います。
・今日聞いたこと、そして気づいたことをたくさんの人に話していきたい。そして動く人を増やしていきたいと思いました。
・誰もが孤立せず、役割を持てる地域づくりを目指したい。
・地元に広めたい。
・多世代交流をいつも常に活動では意識しています。
・常時／平時のみならず、非常時にも地域が重要であることがよくわかりました。
・地域づくりの積み上げを目の前のケースや課題を通じてしていきたいと思います。
・いいところは積極的に取り入れたい。

４．地域まるごとケア・プロジェクトへのご意見・ご提案などがあればお聞かせください。

・報告資料はとても貴重です。今後も頑張って下さい。読むと勇気が出ます。
・進行、司会が変わって聞きづらかった。
・フォーラム、こんなに内容濃いのに集客少なくて残念です。大きなメディアに近い人たちがいてくれるといいですよね。おつかれさまです。ありがとうございました。
・全国のこうした志をもった人と出会わせてくれる志をもったとりくみ、応援団を応援しています !! いつもありがとうございます。
・本日はありがとうございました。もっと全国的に個々の自治体の取り組みが広まり、TTP へとつながることで、その地域のよさが発揮できることを祈っています。
・先進的な取組の紹介や社会への発信をこれからもよろしくお願いします。
・宣伝をもう少し頑張って下さい。とても良い講演でした。
・地域を超えたネットワークの構築の必要性を感じました。今回、初めて参加させていただきましたが、とても勉強になりました。
・アクセスの良い場所で開催してくださり、立派な報告書まで頂きありがとうございました。
・成功物語と一緒に、課題・不満なども聞きたいと思いました。
・先進者の話が伺え、とても参考になりました。
・失敗事例などもあれば、より参考になります。

2018年度地域まるごとケア・プロジェクト報告書
平成 31年 3月 31日発行

発行所：にっぽん子育て応援団
郵便番号　162-0853
東京都新宿区北山伏町 2－ 17　ゆったり～の共同事務所内
電話＆ファックス　03－ 3269－ 3314
Mail:info@nippon-kosodate.jp
URL:http://nippon-kosodate.jp/
デザイン：認定NPO法人びーのびーの 企画室

この報告書は、公益財団法人さわやか福祉財団委託事業により作成いたしました。
（C）Nippon Kosodate Ouendan2019,Printed Japan
この報告書の無断転載・複製は、著作権法上の例外を除いて禁じられています。

この報告書は公益財団法人 さわやか福祉財団の委託により制作しました。